

クロスロード

9



特 集

今に至るまでの道のりも聞きました！

第2回社会還元表彰受賞者の 帰国後の活躍に学ぶ



2 子どもたちに伝えたいSDGs ―世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 社会還元を応援する新しい取り組み

6 特集
今に至るまでの道のりも聞きました！
第2回社会還元表彰受賞者の
帰国後の活躍に学ぶ

14 派遣国の横顔 ボツワナ
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

21 いま、読みたい電子書籍

22 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

24 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

26 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり&アクティビティ

28 先輩隊員のシューカツ記

30 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 あの日、地球の、あの場所で。

35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！

36 公開！私の派遣国生活

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協力さん(ケニア／環境教育／2019年度1次隊)			
氏名	派遣国	職種	隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

表紙によせて
政府が珠算教育を推進しているトンガで、小学校を巡回して教員の指導力向上のための支援を行っています。写真は、現地語学研修でホームステイしたお宅の子どもや近所の友達との一枚。ステイ中、子どもたちとの遊びを通じてトンガ語がかなり上達しました。今も巡回先で会うと名前を呼んでももらえたりするので、嬉しく思います。瀬下弘基さん（トンガ／珠算／2023年度3次隊・群馬県出身）

■国別索引	掲載ページ
エジプト	24
エチオピア	7
カンボジア	8
ケニア	4、5
ザンビア	5、36
ジャマイカ	30
セネガル	23、34
チュニジア	30
トンガ	1
パラグアイ	21
バングラデシュ	9
フィジー	4
フィリピン	5
ブータン	4、15
ブルキナファソ	10、23、24
ベナン	2
ベリーズ	26、35
ボツワナ	16、17、18、19
マラウイ	5、11
マレーシア	5
モンゴル	28
ヨルダン	5
ラオス	5
ルワンダ	5、12

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	5、9、19、34
村落開発普及員	5、16、23、34
コンピュータ技術	4、17
電話交換機	15
野菜栽培	5、36
マーケティング	4
青少年活動	2、8
環境教育	10、18、26
音楽	5、30
珠算	1
理科教育	12
体育	7、28
小学校教育	35
幼児教育	24
デザイン	5
家政	21
看護師	11
病院運営管理	4
障害児・者支援	5

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	36
群馬県	1
埼玉県	10
千葉県	11
東京都	2、16、19、30、35
新潟県	34
神奈川県	24
静岡県	12、24
岐阜県	9
大阪府	18、23、28
和歌山県	26
広島県	17
福岡県	8、15、21
鹿児島県	7



▲ 手にペンキをつけ壁に手形をつける子どもたちとデザインを担当した隊員。年上の子どもは文字を書くなど細かい作業も行った
▶ 壁のペインティングは、デザインが得意な隊員がいくつかアイデアを考え、孤児院の子どもたちと一緒に選んだ。後列右端が大河原さん



子どもたちに
伝えたいSDGs
世界の学校

孤児院を修繕して子どもたちがペインティング 愛着を持って心地よく暮らせる住まいに

おおかわ はなこ
大河原花子さん（ベナン／青少年活動／2019年度2次隊、2022年度7次隊・東京都出身）

ベナンの経済首都コトヌー近郊の福祉センターに配属され、孤児院を巡回し、生活環境・栄養の改善や、子どもへの衛生教育、遊びを通じた学びの支援などを行っています。巡回先の一つ、セント・マリー・トリベ孤児院は、ほとんどの資金を寄付によって運営されていて、3歳から18歳まで約20人が暮らしています。建物の老朽化が激しく、コンクリートブロックを積み重ね、トタン屋根をかぶせた造りで、セメントなどで固められていない壁は隙間や穴だらけで雨が吹き込み、補修が必要な状態でした。私が現地業務費を使って壁を修繕したのですが、その約1カ月後に暴風雨があり外の塀は崩壊したものの、住んでいる建物は無事で、修繕しておいてよかったと思いました。

その後、子どもたちに、自分たちが住む建物に愛情を持ってもらえるよう、他隊員の協力を得て、壁にペインティングを行いました。学校では情操教育が十分に行われていないため、作業を通じて自由に表現する面白さを体験してもらう狙いもありました。ペンキを混ぜて色を作ることから始め、絵の描けない年下の子には手形をつけてもらいました。みんなペンキまみれになって作業を楽しみ、自分が描いたところを指さして誇らしげに教えてくれました。

さらに孤児院の中には、寄付された家具が食堂や寝室に山積みになっていて、部屋が使えないことが気になっていたので、家具を整理し配置し直しました。以前は子どもたちが室内に砂をまいたり、自転車走らせたりするなど屋外との区別がついていない行動があったのですが、それがなくなり、落ち着いて食事したり寝たりできるようになりました。

ペインティングは他隊員が活動する孤児院でも行っていて、ベナンの子どもたちの生活環境を整え、豊かな心を育むことに貢献できたと思っています。



①多くのボランティアが参加する食材配達。写真は食材の仕分け作業
②子どもたちでにぎわう「あだちキッズカフェ」。子どもは無料(①Photo
=ホシカワミナコ、②写真提供=栗野さん)



栗野さんの現在までの道のり

2014年10月 協力隊に参加。現地で「レンタルチャイルド」の存在を知り、衝撃を受ける。

2016年9月 1カ月早い特別短縮が認められて帰国し、大学院に進学。同時に友人と英語学習プログラムを提供する塾経営に乗り出したが、裕福な家庭の子どもが集まることに気づき、閉塾。その後、大学院を中退し、コンサルティング会社の契約社員をしながら起業を模索。

2019年12月頃 東京都で最も生活困窮家庭が多い足立区でこども宅食を行うことを決め、翌20年1月に一人で「足立区こども宅食事務局」を立ち上げ、10軒程度の家庭を回り、食料配達を始める。

2020年3月 コロナ禍の中、足立区の困窮世帯に弁当を届けるプロジェクトに参加し、18年から子ども食堂の活動をしていた柏倉美保子さん(現・チョイふる理事)と知り合い、一緒に活動していくことになる。

2020年夏 無料食材配達「あだち・わくわく便」をスタート。

2021年2月 一般社団法人チョイふる設立。代表理事に。

2021年11～12月 足立区竹の塚の子どもの居場所「あだちキッズカフェ」の改装費用をクラウドファンディングで集める。

2024年2月 足立区内の他2団体と協力し、それぞれの強みを生かした無料LINE相談「Stand by Kids & Parents(通称 SKIP)」をスタート。

2018年以降、これまでに延べ3000世帯以上の足立区在住のさまざまな困難を抱える子育て家庭を対象に活動を行ってきました。

無料食材配達やフードパントリーといった食料支援を実施することで各家庭とつながり、専門家につなげたり、各家庭に合わせた情報提供を行ったりしています。また、オンライン・オフライン両方で「子どもの居場所」を提供することで、延べ1000人以上の子どもたちを支えてきました。お子さ

んが18歳を迎える時点で我々の支援は終わりになりますが、24年6月現在、約400世帯のご家庭とつながりを保ち続けることができます。

「一般社団法人チョイふる」が解決したいのは「選択格差」です。既存の支援制度はあるのに、その情報を得て選択できる人とできない人の間に生じる格差が、子どもの貧困問題の解決を難しくする要因の一つだと考えています。そう考えるに至ったのは、自分自身の原体験があります。父が働かず借金

をして、暴力を振るう家庭で育ちました。大学進学時も新聞奨学金制度を知った時には既に募集期限が過ぎていました。私は教育ローンと貸与型奨学金を利用しましたが、妹は専門学校に通うことすらできませんでした。

その後、協力隊時代に派遣されたエチオピアで、手足を切断され物乞いをさせられている「レンタルチャイルド」の存在を知り、世の中には選択格差を与えられない人もいることに衝撃を受け、自分は日本の子どもの貧困問題解決を目指そうと心に決めました。

そのような背景から、本来たくさんあるはずの選択格差を、少しでも身近にすることが、社会的使命だと考え、団体を設立しました。

苦労していることは、利害関係者間の調整です。ボランティアだけでも高校生からご年配の方まで、さまざまなバックグラウンドを持った地域の方約200名が登録をしてくださっています。また、足立区役所の方や企業の方、地域住民の皆さんへの「橋渡し」の役割を担い、地域の課題をどのように解決していくべきか、日々悩んでいます。

アントレ
プレナー
シップ賞

大賞

無料食材配達と居場所・情報提供で 東京都足立区で子どもの貧困問題と対峙



栗野泰成さん
エチオピア/体育/2014年度
2次隊・鹿児島県出身
一般社団法人チョイふる
代表理事

今に至るまでの道のりも聞きました！ 第2回社会還元表彰受賞者の 帰国後の活躍に学ぶ

今年で2回目を迎えた、「JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」。「JICA海外協力隊 起業支援プロジェクトBLUE」もスタートし、協力隊員の帰国後の社会還元にますます注目が集まっています。そこで本特集では、第2回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰受賞者に、取り組み内容や思い、取り組みを始めるに至った経緯を伺いました。隊員時代から取り組みを考えていた方もいますし、今に至る道のりで大いに悩み、紆余曲折された方もいます。現役隊員の皆さんは将来を考える参考にしてみては？

(写真は2024年6月7日に行われた表彰式。小柳さんはカンボジアからオンラインで登壇)



▲表彰式当日の映像はコチラ

Edit & Text=ホシカワミナコ Photo=ホシカワミナコ(P6, 7, 10～13プロフィール)、阿部純一(本誌・P9プロフィール)



①ビアバーの前で。創業メンバー、社員と ②ビアバーでは、地元の美濃焼作家の作品でビールを提供 ③イベントで交流人口も増やす。写真は「カマフェス（カマドピアフェスティバル）」（①～③写真提供＝東さん）

東さんの現在までの道のり

2014年2月～16年秋 バングラデシュでの隊員時代、リスナーの健康や日本の魅力を伝えるラジオ番組の制作に携わる。帰国後は、日本の魅力を発信する映像を作りたいと、フィリピンへの語学留学を経て、2カ月間ニューヨークの映画制作学校へ。

2017年5月 宮城県石巻市で活動するNPOの女性の取り組みを通じて、ビール造りに興味を持つ。

2017年6月 釜戸町で地域に関わる仕事を探したのち、青年海外協力隊事務局の進路相談カウンセラーからの紹介で、地方創成に関わる都内の広告制作会社に入社。仕事をしながら、地元でできることを模索。ビアジャーナリスト養成講座にも通い始めて、クラフトビールでの町おこしを考えるようになった。

2018年6月～ 有志を募り、地元の東濃地方でビールと地元食材のペアリングなどを考える飲み会を定期的に開くようになる。また、当時山梨県のビール醸造所で働いていた丹羽さんに会い、将来、岐阜で醸造所を造りたいと伝え、協力を仰いだところ、丹羽さんもこの会に参加してくれるようになった。

2019年 別の企業に転職し、まちづくりのための補助金申請の方法など、具体的なノウハウを学びながら、酒蔵ツーリズム事業などを担当。

2020年4月23日 会社設立。すぐに革新的なビールが話題に。ファンや仲間が増えていき、ますます地元を盛り上げている。

2024年6月 「ピアワングランプリ 2024」で総合優勝。

地域 活性化賞

クラフトビールの醸造・販売を通じて
地域のPR移住促進。地元を諦めない！



あずま えりこ
東 恵理子さん
バングラデシュ／コミュニティ開発
／2013年度3次隊・岐阜県出身
株式会社東美濃ピアワークス
代表取締役

私の地元・岐阜県瑞浪市釜戸町は、この20年間で人口が1231人も減り、現在約2350人、2020年の空き家は117軒と、日本の多くの地方と同じように人口減少が止まりません。そんな釜戸町や地域を元気にしたいと、20年4月23日（クラフトビールの日）に、岐阜県出身でビール醸造家のレジエントと称される丹羽智さんと、多治見市でまちづくり会社に勤務していた岡部青洋さんと3人で、クラフトビール醸造所「CANADO BREWERY（カマドブリュワリー）」を立ち上げました。17年に、知人の女性が携わって

いた震災復興活動の一環で、宮城県石巻市で育てたホップを市内の醸造所でビールにして売るという取り組みを知り、私自身ビールが好きだったこともあって興味を持ったのが、そもそものきっかけでした。19年から、会社勤めと兼業での醸造所設立を模索していましたが、丹羽さんが退職・起業を決めたことに後押しされ、私も退職して取り組むことを決意。設立資金は自治体からの創業補助金500万円と、融資で賄いました。地元食材をビールの副原料に使ったり、美濃焼や景勝地・竜吟の滝などの

地域資源を生かすビール造りを行い、21年冬にはクラウドファンディングでビアバーも開設しました。また、22年には空き家対策チームもできて、1年間で6組13人の移住もありました。こうした取り組みを並行することにより、単にクラフトビールを造るだけでなく、地域をPRし、「乾杯」で人をつなぎ、釜戸町への交流・関係人口や移住者を増やす取り組みも行っています。今後、空き家を活用したゲストハウスを本格稼働させ、ビールを通じて人と人のつながりで人口減少を解決していきたいと思っています。



①幼稚園教員へ行うワークショップ ②小柳さんたちが作った教材を活用している幼稚園（①②写真提供＝小柳さん）



小柳さんの現在までの道のり

協力隊前 大学卒業後、オーストラリアで2年間日本語教師のアシスタントを務め、帰国後、中学校の英語教師を経て地元の国際交流協会に転職。そこでJICAの国際協力推進員と知り合い、協力隊への応募を決める。また派遣先で役に立つかもしれないと、保育士の資格を取得。

2014年7月～ 派遣されたカンボジアでは、中学校での運動会開催のほか、他団体が行っていた移動映画館の立ち上げ・活動も手伝う。

2016年後半～17年 オーストラリアでTuk Tuk for Childrenを立ち上げたが、カンボジアで活動するには現地の団体と連携するか、自分たちがカンボジアで団体を設立する必要があった。当初は前者を取り、連携相手のNGOがサポートしていた公立幼稚園6校の教員の指導と、移動図書館事業からスタート。

2018年 連携していたNGOがなくなったため、Rermork for Childrenの団体名で登録し、活動を続ける。移動図書館の絵本は小柳さんとカンボジア人スタッフでクメール語に翻訳していたが、寄付された絵本は、カンボジアの文化に合わない内容のものも少なくなかったため、現地イラストレーターにも加わってもらい、自分たちで絵本製作も始める。

協力隊時代に任地の幼稚園教員のトレーニングの必要性や教材不足を感じた経験から、2016年に夫と「ACNC認定Tuk Tuk for Children（トゥクトゥクフォーチルドレン）」を立ち上げました。協力隊時代の任地でもあるカンボジアのポーサット州で、提携する幼稚園の幼稚園教員に向けたワークショップを開催してきたほか、1200点以上の教材を作り、幼稚園教員が無料で使えるよう、各種SNSと公式ウェブサイトで公開しています。カンボジアでのNGO登録団体名

は「Rermork for Children（ルモックフォーチルドレン）」で、ウェブサイトなどは「TukTuk Charity」というブランド名を使用しています。教材の本身は、カンボジアの文化に合わせた遊び歌や政府推奨曲の音源を120曲以上、幼児向けの絵本は18種類、簡単にできる工作やアクティビティ、アイデア動画は800本近くに上ります。300種類以上あるワークショップは、コロナ禍で自宅学習になった際にも重宝されました。実は、私たちの団体には幼児教育の

スペシャリストはいません。私は保育士資格は持っていますが、園で教えたことはありません。代表を務める夫も、もともと地元NGOでカンボジアの子どもに関わる支援をしていましたが、資格はありません。カンボジアの幼児教育のカリキュラムを読み込み、海外からボランティアで来る幼児教育のスペシャリストと協力し、カンボジアの保育現場を見てもらって、現地で幼児教育に携わる方など現場の意見も取り入れながら、現場が必要とされ、かつ使いやすい教材を作ってきました。その多くは、既に世界中にある幼児教育の教材を、カンボジアの幼稚園教員が使いやすいようにアレンジしたものです。将来的には活動を地元の人たちだけで持続可能なものにしていくために、カンボジア初の幼児向け教育番組を制作して、ウェブサイトなどで公開する予定です。それにより保護者が家庭でもできるアイデアを得られ、幼稚園教員が遊びを通して学びの参考にでき、また教員自身が考えた教材を皆に共有できる仕組みを整えていきたいです。

アントレ プレナー シップ賞

カンボジアの幼児教育のため、教育者の指導や誰もが使えるフリー教材を提供



こやなぎ まゆ
小柳真裕さん
カンボジア／青少年活動／2014年度
1次隊・福岡県出身
ACNC認定TukTukforChildren理事
Rermork for Children アドバイザー



①外国人患者へ向け、オンライン医療通訳を介して入院や検査の説明を行う ②院内研修の様子 (①②写真提供=香川さん)



香川さんの現在までの道のり

2011年 勤務している成田赤十字病院に協力隊の現職参加を相談。

2013年1月 協力隊員としてマラウイへ派遣。マラウイでの看護師資格取得のため、首都で看護実習を受け、資格取得の後、4月に任地のドーフ県立病院に赴任。5S活動や巡回診療支援を行う。

2015年3月 任期を2カ月間延長して帰国し、4月に復職。HCU（高度治療室）の所属になる。

2018年 病院が行う海外での緊急医療援助に関わりたいという思いと、マラウイで仕事の経験値よりも学位や学歴を重要視されることを実感したことで、仕事をしながら大学院へ進学。外国人患者に関わる看護をテーマにした研究を行い、20年3月修了。

2020年9月 国際診療支援室へ異動が決まり、HCUと兼務に。その後、出産と育児を経て、23年5月に復帰して以降は、時短勤務で働きながら国際診療支援室の専任看護師として活動中。

アプリを開発し、いつ、どの地点でどんなごみが回収されたかをマッピングできるようにしました。

実績は、総回収量約1800キログラム、再利用は約400キログラム、回収MAPデータは670件、協賛・パートナー企業・団体は33になりました。また21のメディアで取り上げていただき、23年8月には、瀬戸内海研究フォーラム in 山口にて最優秀賞と、アカデミックな賞を含めてさまざまな賞を頂けるようになりました。

縁もゆかりもなかった小豆島で地元の方々と関係性を築けたのは、協力隊時代に、現地の人たちと同じ釜の飯を食べて仲良くなった経験が生かされています。ようやく目指す未来に突き進んでいるとはいえ、NPO立ち上げから2年間は資金調達方法も運営方法も手探りで、失敗の連続でした。起業を考えている現役隊員の方には、「自分で学び続けること・人や仲間頼ること・致命傷にならないリスクを考えること」を踏まえ、たとえ大変でもどうしてもやりたいことがあるならやったほうが良いと、お伝えしたいです。

多文化 共生賞

看護師として外国人患者の受診をサポート。 医療従事者への研修で異文化理解を促す

成田赤十字病院国際診療支援室の専任看護師として、外国人患者やその家族への医療支援（通院、入院・退院、帰国までの支援）のほか、病院内の医療従事者に向け、現場レベルで異文化看護に関する研修や出前講座などを行っています。

当病院が日本の窓口である成田国際空港のある千葉県成田市にあることも関係し、訪日外国人の増加と共に、当院への外国人患者数も増えていきます。2023年度の外国人患者数は、全患者数の約2パーセントに当たる6281人で、5年前の3736人に比べて1.6倍以上増加しました。

国籍は多い順にネパール、スリランカ、中国、フィリピン、ベトナム、タイで、旅行者、技能実習生、難民申請者、留学生、長期滞在者など、さまざまな方が受診されます。飛行機内で具合が悪くなり、成田空港から緊急搬送されてくる方もいれば、日本に長く住んでいる外国人の方の高齢化が進み、日本人の高齢者にも多い心筋梗塞などの病気で入院される方もいます。

外国人患者の方々も日本人同様、受診の際は専門の科を受診します。17年に国際救護部開設準備室（現在は国際診療支援室）ができてから、タブレットを使い、遠隔で医療通訳を交えて外



かがわ さとる
香川沙由理さん
マラウイ／看護師／2012年度
3次隊・千葉県出身
成田赤十字病院 看護師

江川さんの現在までの道のり

学生時代 バックパッカーで訪れた国々で、適切に処理されず放置されたごみの光景を多く見て、ごみ問題に関心を持つ。大学卒業後、IT企業で営業職に従事。海外でごみ問題の解決策構築に挑戦したいという思いが募り、協力隊に応募。

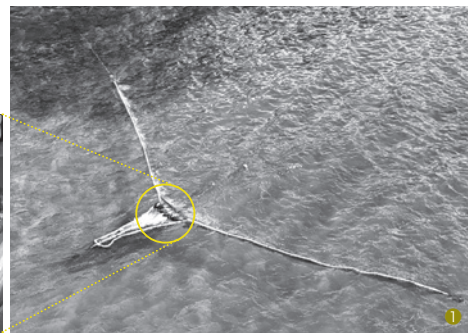
2017年9月 ブルキナファソでの活動中に3カ月かけて穴を掘り、簡易埋め立て場を作ったところ、環境省や市役所衛生課が動くきっかけになった。また内陸で放置されたごみが海洋ごみになることに気づく。19年7月の任期満了後、コンゴ民主共和国の日本大使館で勤務していたが、新型コロナウイルス感染症拡大のための退避命令で、20年春に帰国。

2020年12月 NPO 法人クリーンオーシャンアンサンプルを設立。設立メンバーは全員JICA海外協力隊の環境教育や廃棄物処理といった環境系職種出身者。小豆島の漁業者と関係性を深めつつも、始めは兼業でスタート。

2022年4月 小豆島に移住、専業に。企業などから援助いただいた資金を法人にすべて注ぎ、自分は1年間無給で活動を軌道に乗せる。7月に海上での実証実験開始。



①海洋ごみの回収装置
②分別した海洋ごみ ③海上回収活動は地元漁師さんの協力があつてこそ。地元との付き合いも大事にしている (①②写真提供=江川さん、Photo=③永田佳大)



2022年のOECD（経済協力開発機構）のレポートによると、世界には3000万トンの海洋プラスチックごみが堆積していて、毎年170万トン以上の海洋プラスチックが流出していると推定されています。ところが、海洋ごみは陸ごみのように処理責任が明確ではなく、海流によってごみも循環するため「海洋ごみは課題と感じているが、課題が大きいと、自国だけでやると負担が重過ぎる。一国だけではない協力体制が必要」との感覚が各国にあります。香川県には底引き網などで網にかかる海洋ごみを漁業者から引き取り、運搬・処理する仕組みがあります。そこで私たちの団体は香川県小豆島を拠点にすることを決め、慈善活

動ではなくビジネスの立場での海洋ごみ回収の実現を目指し、回収活動に今までなかった付加価値をつけるため、20年12月から海洋ごみの回収、定量化（データ）、再利用、さらに海上での回収実証実験などを行っています。

一部の回収活動にはスポンサーをつけて回収支援証明書を発行することで、活動に付加価値を与えるなどとして、いずれは顧客のニーズを満たすような活動まで昇華させようと挑戦しています。回収した海洋ごみはデータ化し、ウェブマップ上でひもづけられるよう準備を進めています。ごみは分別して再利用（リサイクル、アップサイクル）できるものに分け、提携するリサイクル会社に売っています。今後は、リサイクルされた素材を使って自社製品の開発も行いたいと思っています。

地元漁業者の協力の下、海上でのより効率的なごみ回収技術も開発中で、現在7回目の実証実験まで終えています。今期はこれまでの知見を生かした河川用の回収技術開発にも取り組み始めています。ウェブマップ上に回収データをもつづけるために記録用の写真

ボランティア 活動を通じた 社会還元実践賞

海上で海洋ごみを回収、IT活用、再利用。 持続可能な解決策の構築とその実践に挑む



えがわ ゆうき
江川裕基さん
ブルキナファソ／環境教育／
2017年度2次隊・埼玉県出身
NPO法人クリーンオーシャンアンサンプル 代表理事

YAMBI CONNECT LLC.

設立：2018年

社員数：4人

本社所在地：ルワンダ

事業内容：スタディツアーや視察ツアーなどのコーディネート、日本語教室の運営



株式会社マキノハラボ

設立：2018年

社員数：5人（他にパート、アルバイトなど約50人）

本社所在地：静岡県牧之原市

事業内容：廃校になった小学校の利活用。施設活用、宿泊・企業研修、スマート農業、教育事業、まちづくり



PickUp

【浅野さんの仕事術に学ぶ】

株式会社マキノハラボに入社する前に、YAMBI CONNECT LLC. を立ち上げていた浅野さん。現在は二つの会社の経営者として、営利を求めながら多岐にわたる事業を行っています。浅野さんが仕事をする上で気をつけていることや経営のコツを聞きました。

Point 1 事業は成功している他社をまねてアレンジ

マキノハラボでは複数事業があり、それぞれリーダーを立てています。スマート農業以外はどれもそこまで難しい事業ではないので、まずはその事業で成功している会社の一流のサービスを体験してみたりしながら、どのように行っているかを調べます。それを基に自分たちの現場にフィットする形を模索していきます。

Point 2 社員間の人間関係はフラットに

仕事を進める上でのコミュニケーションコストは大きく、「あの人の面倒くさいからどうやって相談しよう」などと周囲が気を使いながら仕事をする時間は無駄です。だから二つの会社の人間関係はフラットに、皆が自分の考えを言い合える環境づくりを心がけています。それによりPDCAサイクルがうまく回り、失敗してもすぐに再チャレンジができるようになりました。

Point 3 2～3年で形にする

マキノハラボでは、「楽しく、かつビジネスになりそう」という視点で事業を展開しているので、新規事業を始める1年目はいろいろな方法を試します。1年やってみると何がダメでうまくいっていないかが大抵わかります。社員には2～3年目でその事業の専門業者になれるように目指そうと伝えています。

Point 4 さまざまな方法でコスト削減

人件費を削減するためにも、マキノハラボでは専門業者に頼まずに、アルバイトやパートを雇って経費を抑えています。例えば、1日に80人近くのお客様を迎えることもある宿泊所の布団のシーツの取り換えや洗濯、客室の掃除など、ホテルなら専門業者に委託するところを、私たちは地元の方にアルバイトやパートで入ってもらいます。

また、電灯はすべて蛍光灯からLEDにしつつ、スマートスイッチを整備し、館内照明を一括管理できるようにする、入館者が来た時に受付に人がいなくても呼び出しができるようなセンサーをつける、宿泊客の夕食は食材だけ用意し、客側でパーベキューを自由にしてもらうことで対応する、キャンプ用品はテントなどは持参してもらい、足りないキャンプ用品の貸し出しは無人の有料貸し出しで対応するなど、IoTと原始的な方法の両方を導入しています。

Point 5 会社の強みを生かして展開を広げる

スマート農業など、深掘りされていないテーマの事業にもマキノハラボでは力を入れて地域活性化いき、学んだ知識やノウハウや人脈を、ルワンダでYAMBI CONNECTの事業に加えたり、他の地域にも活用できたらと思っています。

マキノハラボは「非日常で元気になるだろう」をテーマにしています。まずはこの会社で働いている人たちが元気になる、我々が中心となり、深掘りされていないテーマのノウハウを蓄積して強みとし、世界に波及していくことを目指しています。



① 初期支援教室に通う、小学校高学年～中学生の子どもたち ② スマート農業では、ドローンを使って画像を撮影し、緑茶の生育具合などを確認することも (① Photo=阿部純一本誌、② 写真提供=浅野さん)

浅野さんの現在までの道のり

2015年7月～ 新卒で協力隊に参加。ルワンダの小中学校で物理を教えることになったが、文系学部卒だったため苦労が多かった。

2017年 任期終了の約3カ月前、ルワンダ人の友人から「一緒に仕事をしよう」と誘われ、ルワンダでスタディツアーやビジネスツアー、現地アテンドサポートなどを行うYAMBI CONNECT LLC. を起業。「もともと浪人したり大学を1年休学しアフリカを旅したりしていたので、協力隊後に普通に就職したくないという気持ちもありました」。その後、ルワンダで知り合った日本人研究者に誘われ、ルワンダで人工衛星打ち上げに関連するICT技術の実証にも並行して携わる。

2019年 先の研究者が18年2月に設立したマキノハラボに誘われ、スマート農業などの知見をルワンダに還元したいという思いもあり、YAMBI CONNECT LLC. を経営する傍ら参画。

2022年 マキノハラボ創業者から経営を引き継ぎ、2社の経営者に。また、東京農業大学大学院に進学し、スマート農業の研究に取り組む。

静岡県牧之原市で廃校になった旧片浜小学校を利活用する、「株式会社マキノハラボ」を経営しています。牧之原市と賃貸借契約を結び、施設活用事業、DX・スマート農業事業、宿泊・合宿・企業研修事業、教育事業（日本語・プログラミング）、まちづくり（イベント）事業を行っています。

DX・スマート農業事業では、地元主力産業である緑茶の生産や輸出販売の際、衛星画像による生育診断やAIによるデータ統合分析、越境ECサイトでのオンライン商談といったスマート農業技術を導入し、作業の軽減、品質向上、輸出拡大につなげています。宿泊・合宿・企業研修事業では、教室を客室に、家庭科室や理科室を食事場所に改装することで、1グループ80人近くの団体でも対応可能です。グラウンドにはキャンプ場やプライベートサウナもあります。少年団や部活動の団体、大学サークル、コスプレイベントグループ、家族連れなどの幅広いご利用があります。

用があります。オリジナルコンテンツの企業研修は年間約5500人の利用があります。

教育事業では、市在住の外国にルーツを持つ小学生・中学生に向けた初期支援教室（小中学校に通う前に日本語や日本の文化を学ぶ最長半年間の教室）を行うほか、キャリアデザインスクールや、IoT指導者養成プログラムなどを開講。

まちづくり事業では、音楽フェス、納涼祭、国際交流フットサルイベントなどを開催してきました。

新卒で参加した協力隊ではルワンダ語を必死で学んで意思疎通を図りました。結果、友人がで「YAMBI CONNECT LLC.」の起業に至りました。ルワンダでのつながりがきっかけで、マキノハラボも手伝うようになりました。私は浜松市出身で、牧之原市とは縁もゆかりもありませんでした。どちらの会社も協力隊で学んだように、地域の方々と親しくなり、協力いただきながら事業を広げています。自然豊かな牧之原に遊びに、泊まりに来てください。心よりお待ちしております。

地域
活性化賞

外国人の子どもたちの学びの場から
ビジネス・遊びまで。廃校を楽しく利活用



あさの けんし
浅野拳史さん
ルワンダ/理科教育 / 2015年度
1次隊・静岡県出身
株式会社マキノハラボ 代表取締役
YAMBI CONNECT LLC. CEO

／ お話を伺ったのは ／

まだひでき
馬田英樹さん

ブータン／電話交換機／1991年度3次隊・
福岡県出身

PROFILE

JICAボツワナ支所・企画調査員(ボランティア事業)。
工業高校卒業後、通信会社に勤務。JICA海外協力
隊に現職参加。復職後、大学に進学。2001年以降、
JICAのネパール、ウズベキスタン、カンボジア、エチ
オピア、タンザニアの各事務所で企画調査員(ボラン
ティア事業)として勤務。NPO九州海外協力協会事
務局長を経て、21年より現職。



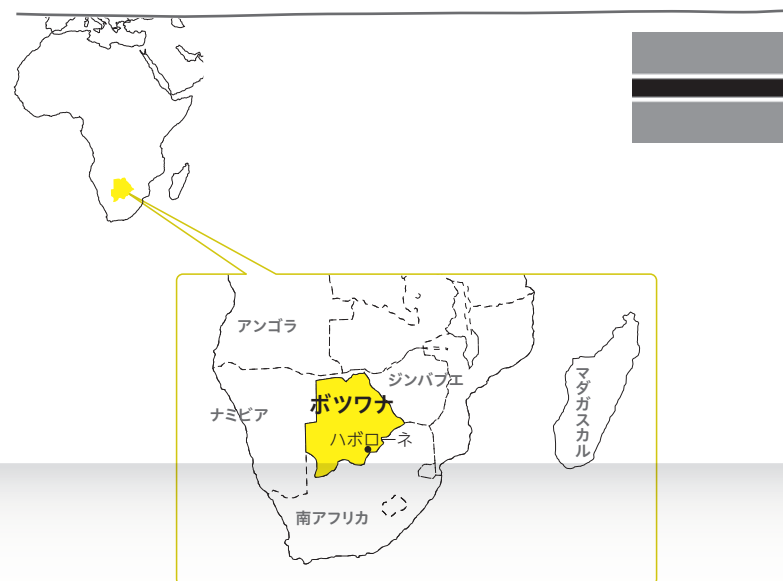
首都ハボローネ中心部のビルから市街を望む。左側奥の低い山の向こ
う側は南アフリカ共和国

派遣国の 横顔

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈ボツワナ〉

鉱物資源の収益を国民の生活向上に生かす高中所得国。
豊かな自然や動物など観光資源も大きな魅力。

ボツワナの基礎知識



ボツワナ共和国

面積：56.7万平方キロメートル(日本の約1.5倍)

人口：263万人(2022年、世銀資料)

首都：ハボローネ

民族：ツワナ族(79%)、カラング族(11%)、
バサルワ族(3%) など

言語：英語、ツワナ語(国語)

宗教：キリスト教、伝統宗教

※2024年5月現在 出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/botswana/data.html>

派遣実績

派遣取極締結日：1992年3月3日

派遣取極締結地：東京

派遣開始：1992年8月

派遣隊員累計：443人

※2024年6月30日現在
出典：国際協力機構(JICA)

モノカルチャー経済からの脱却へ 技術分野の職種へのニーズが高い

地域格差の解消からスポーツ強化まで、幅広い分野で協力隊員が活躍している。

アフリカ大陸南部に位置するボツワナは、ナミビア、ジンバブエ、南アフリカ共和国に囲まれた内陸国で、中部や西部の広い範囲が砂漠地帯になっている。

1966年、イギリスからの独立を果たした翌年にダイヤモンドが、後に銅、ニッケルといった鉱物資源が発見され、その収益を教育や医療、社会インフラなどの整備に活用して、成長を遂げてきた。JICAボツワナ支所の馬田英樹さんは、「アフリカの中でも経済的に発展した国で、高中所得国の仲間入りを果たしています」と話す。「国の資金が使われる公共事業が経済をけん引している印象ですが、一方で若い人を中心に失業率が高い水準にあります」

あまり雇用が広がらない資源産業に依存する経済から脱却することを目的に、産業の多角化を担う民間セクターや、そこで働く人材の育成に国は力を入れている。

そのため、協力隊への要請は、コンピュータ技術や自動車整備、木工などへのニーズが多い。生産性・品質向上を進める「カイゼン」についても、シニア案件の隊員が企業コンサルティングなどの活動を支援している。

「都市と地方の格差も問題です。都市では物があふれ、人々の生活が豊かな一方、一歩郊外に出ると、電気や水道が不安定なところもあります」

他にも、貧困削減に取り組むコミュニティ開発隊員や、各種の教育系隊員が活躍している。スポーツ分野では、柔道やフットボールの派遣が継続されており、こうした種目ではアフリカ内で強豪の地位を保っている。「ボツワナの魅力の一つは、人々が穏やかなところ。シャイな面があり、少し日本人にも似ていると思います」と馬田さん。「この国に来て感じたのが車の運転です。信号機が壊れている交差点でも、譲り合って一台一台、順番に入っていく。他の国ではあまり

見られない、素晴らしいマナーです」。

世界最大級の内陸湿地であるオカバンゴ・デルタやマカディカディ塩湖などの自然環境を有するほか、ゾウの生息数が世界一と野生動物の宝庫でもあり、観光分野のポテンシャルも高い。

ボツワナは降水量が非常に少なく、干ばつに見舞われることもあり、水がとても貴重だ。「国旗のブルーは命を支える雨と水を表し、通貨単位の『プラー』は、現地のツワナ語で水を意味しています。隊員は人々が水を大切にすることを理解しておいたほうがよいでしょう」。

「活動の上で大切なのが、挨拶です。会ったら、必ず挨拶の言葉をかけて握手、そして『最近はどう？家族は元気？』と話するなど、時間をかけて丁寧にやります。ポイントはツワナ語で話すこと。簡単な言葉だけでも、雰囲気や和らぎます。身近な人々と挨拶を入り口にして信頼関係を築いてほしいと思います」



トゥリ動物保護区にはゾウのほか数多くの野生動物が生息しており、ボツワナ観光の人気エリア

さとうしょうご
佐藤省吾さん

コンピュータ技術／2015年度1次隊・広島県出身



PROFILE

高校時代から海外への憧れがあったが、世界とつながることができるコンピュータやネットにも興味を持ち、ネット関連のベンチャー企業で13年ほど働いてネットワークやサーバーの管理に関する技術を磨いた。会社の視察で訪れたカンボジアでネット環境が整っていることを知り、途上国でもコンピュータやネットワーク分野で発展に貢献できるのではないかと協力隊参加を決意。現職参加でボツワナに赴任した。



短大の生徒たちに教える佐藤さん。「先生方が教室にあまりいなかったため、私が生徒たちに指導する機会が多く、知識や技術を伝えられました」



キャンプヒルの施設で子どもたちと生活を共にしながら支援する稲森さん

いなもりたかお
稲森岳央さん

村落開発普及員／1998年度1次隊・東京都出身

PROFILE

普通の人と違うことや、世の中のプラスになることがしたいと協力隊を目指す。海外で農業普及ができるスキルを身につけるため農業大学に進学。大学院時代にはタイの農村調査も行い、卒業後は農業高校の教員を務めた。協力隊はタイへの派遣を希望していたが、技術顧問の勤めで第2希望のボツワナへ。任期満了後は、JICAジュニア専門員や開発コンサルタントとして、ガーナや南スーダン、カメルーンなどで業務に当たった。現在は岡山大学グローバル人材育成院准教授。学生には「第2希望の選択が、良い結果につながることもある」と話している。



新たな学びを取り入れ
人々が平等に豊かになれる
社会を目指して

互いに思いやり、支え合って生きるボツワナの人々。支援を通じて体験した国の魅力を紹介します。

障害者を差別せず共に学び合う
助け合って生きていく姿に学ぶ

稲森岳央さんは1998年、首都ハボローネからバスで約1時間のオツツエ村にある自立支援施設「キャンプヒル・コミュニティトラスト」に赴任した。障害のある人と健常者が共同生活を行う中で、お互いに学び合うキャンプヒル運動(※)の実践施設として設立され、NGOコミュニティトラストによって初等教育や職業訓練が実施されている。

稲森さんへの要請は、高校生くらいから20代くらいまでの障害のある青少年に農業技術を教えることだった。施設の農場では野菜が栽培されていて、稲森さんはオレンジの挿し木の方法などを教えたほか、牛の飼育や養鶏、養蜂を担うこともあった。

施設の資金は十分でなく、収穫したオレンジや野菜などを販売所で売って

きを得た稲森さんは、現在も大学で異文化理解について学生に伝えている。

コンピュータ技術は経験が大事
同僚や学生に自信を与えた活動

コンピュータ技術隊員の佐藤省吾さんは、2015年にハボローネから約200キロ離れたジュワネンの町にある技術短期大学に配属された。同短大には、情報通信技術(ICT)、ビジネス、自動車、服飾などのコースがあり、佐藤さんはICT部門に配属された。学内ネットワークの維持管理などを行うIT担当職員の技術向上を図りながら、メンテナン스를行った。

学内のIT関係は、この職員が一人で担当していた。彼女は、パソコンの使用法や修理など、基本的な知識は持っていた。「しかし、ネットワークやサーバーのトラブルなどには対処した経験が少なく、自信もなさそうでした」。

問題は、IT担当職員と共に作業する機会がほとんどないことだった。時間どおりに出勤するが、気づくと姿が見えなくなっている。教員も学生に課題を出した後は教室を出ていく。そのため、学生たちが職員室にいる佐藤さんに操作などを聞きに来ることが増え、佐藤さんは学生たちにワードやエクセルの操作方法、メンテナン作業に必要なLANケーブルのつなぎ方な

て運営資金の足しにしていたが、「大きな収入にはなっていませんでした」。施設の子どもたちとスタッフは自分たちで農作業ができており、稲森さんは基本的にはその様子を見守っていた。工事業者を雇う余裕もなかったためか、稲森さんはやがて施設メンテナンスの仕事を頼まれるようになった。「大学時代の配管工のアルバイト経験が役に立ちました。協力隊員で誰よりもコンクリートを練ったという自信はあります」と稲森さんは苦笑する。

資金と支援者を増やすため、施設にカフェが造られることになった際、施設の子どもや子連れ客のため、稲森さんが滑り台やブランコを造った。それは20年以上たった今も使われている。

活動するうち、稲森さんは障害者が比較的短命であることに気づいた。「自分の活動に意味があるのか悩んだ時期もありましたが、せつかくこの世に生を受けた彼らに、楽しかったという思い出をつくるのが自分のミッションだと気持ちを入れ替えました」

感心したことの一つに、子どもたちが助け合って生活していることがあった。「自分で用を足すことができない車椅子の子もいましたが、周囲の子どもたちが、当たり前のようにトイレやシャワーをサポートしていました」。

施設内には、家具作りを行う職業訓練校があり、車椅子でバスに乗り、自宅から通ってくる年配の男性がいた。

どを教えた。

職員との協働ができないことをICT部門長に相談したところ、担当職員の女性は妊娠していて病院での受診のため出かけていたことが判明。他の教員や職員も、病院の受診、公共料金の支払いなどで学外に出ていた。それらの窓口は平日の日中だけだからだ。

そんな事情も踏まえて、2年目の活動計画を想定していたが、その年は新入生の受け入れが停止された。ボツワナ独立50周年の節目の省庁再編に伴い、教育省も改名されるなど混乱の中、短大の講義要項の期限が切れ、それで授業を行ったとしても卒業と認められない事態になったためだ。残っていた2年生が6月に卒業すると、短大にはほとんど誰もいなくなり、佐藤さんは途方に暮れた。

それに加え、佐藤さんが常々残念に思っていたことは、職員も学生も、実作業の経験が圧倒的に少ないことだった。そのため、知識はあるのに、実作業の経験がないから自信がつかない。

そんな時、IT担当職員から、町内の小学校のコンピュータトラブルの対処に同行してほしいと声がかかった。「小学校でのメンテナンスは、現場経験を通じて自信をつけるにはもってこいの機会だと思い、職員のほか、ICT部門のインターンも連れて小学校に赴きました」

小・中学校へ赴いてのメンテナン



生徒たちにLANケーブルのつなぎ方を教える佐藤さん



栽培して収穫したオレンジを販売する施設の子どもたち

「道路もバスも、バリアフリー対応ではありませんでしたが、周囲の人たちがバスの乗り降りを手伝っていましたが、バリアフリーの設備がなくても、助け合うことができれば、問題なく暮らせるのだと思いました」。

稲森さんが障害者への認識を変えるような出来事もあった。

「施設内の中学校から移ってきた片手の不自由な女子がいました。私は農作業の何ができるか見守っていたのですが、彼女は自発的に片手でクワを持ち、畑を耕し始めました。障害があるからこの作業は難しいと勝手に限界をつくってはいけない、機会を奪ってはいけない、と反省しました」

障害者を含む助け合いの精神など、ボツワナの人々との生活で多くの気づ

は佐藤さんとIT担当職員との新たな仕事として継続的に行った。

任期満了が近づいた頃、緊急にパソコンのウイルス対策をしなければなら

ない事態が発生した。「担当職員は『自分でやってみる』と宣言し、驚くほど率先して作業を進めました。無事に作業をやり遂げたことで『すごく自信がきました』とも言ってくれて、成長を感じました」

学生たちが自分たちだけで、町の図書館の無線システムを修理したこともあった。「私は現場に行かず、わからない部分を電話で指示しただけです。学生たちとの交流が多く、その中でLANケーブルの知識も教えました。学生たちは身近に私の作業の様子を見

る中で、自分たちにもできそうだと勇氣を持ってくれたのかと思います」。

よしだあきこ
吉田晃子さん



PROFILE

16年間勤めた自動車部品会社を退職し、現職参加で活動中。会社では営業や受発注管理を通じてカイゼン活動を進めていた。趣味でベトナムやカンボジアなど20カ国以上を旅行する中で、人と人の距離の近さに魅力を感じ、海外でカイゼンの手法を伝えて発展に貢献したいと応募した。コロナ禍による約2年間の待機期間中には、活動に役立てようとせっけん作りやパン作りを身につけた。当初のタンザニアから任国変更の上、ボツワナに赴任した。



本格的なピザ窯を造る吉田さん。製作には多くの地元の人々が協力してくれた

活動の舞台裏

ボツワナで結婚するのは大変！

ボツワナでは、結婚する際、男性から女性に牛を贈る風習がある。相場は8頭前後で、牛が用意できず結婚できない人もいう。コンピュータ技術隊員の佐藤省吾さんは、ボツワナの男性と話していて、自分に娘がいると言うと、「あなたの娘さんは牛何頭分だい?」と聞かれて面食らったそうだ。

結婚式もハードルが高い。親族や招待者だけでなく、地域の人など誰でも参加してよいのだ。



屋外のテントで行われた結婚披露宴の様子

佐藤さんは、派遣中に何回も結婚式に出席した。2時間あまり続く親族紹介が終わると、いよいよ祝いの料理へ。前日から準備が進められた牛肉の料理やサラダなど、普段はなかなか食べられないようなものが盛大に振る舞われる。この料理を楽しみに、人々が集まり、一緒に歌を歌ったり、アフリカダンスを楽しんだりする。

結婚式に100人くらい集まることは普通で、多い時には200人になることも。招待状も、会費や祝儀も不要で、費用はすべて結婚する人の負担。1回で100万円かかることもある。そのため、「結婚式を挙げるのは、30代から50代で経済的に余裕のある人が多かったです」（佐藤さん）。

知っていますか？

派遣地域の歴史とこれから 〈ボツワナ〉

さかがみれいか
阪上鈴華さん

環境教育／2022年度1次隊・大阪府出身

PROFILE

大学卒業後に商社で1年働き、退職して大阪市内の中学校で英語教員を務め、現職教員特別参加制度で協力隊に参加。コロナ禍で生徒と外国人との交流事業がなくなり、自分の目を通して海外を伝えたいという思いと、教諭だった父自身がコンピュータ技術の隊員として協力隊参加を希望しながら他界し、「父が隊員として見たかった世界を知りたい」との思いもあり応募を決断した。自分の経験を広げるため、教員職種ではなく環境教育を選び、複数の学校を巡回できる要請を選択した。



阪上さんは、子どもたちへの環境教育と同時に、挙手や話し合いなど、生徒が積極的に参加する授業を行った

自ら巡回先の学校を開拓して 5千人以上の生徒に環境教育

阪上鈴華さんは環境教育隊員として2022年に着任した。配属先は、ハローネから約50キロの位置にあるクウェネン県庁の公衆衛生部。しかし、環境教育の担当者がいないどころか、環境教育がどのようなものかを理解している人もいなかった。その上、最初の約1カ月間は廃棄物処理の担当と誤解され埋め立て地の担当課に配属されたため、自分は学校で環境教育をするために来たと周囲に伝え、環境衛生担当課に変更してもらった。

その後も学校巡回に連れて行ってくれる人はいなかったため、阪上さんは歩いて行ける範囲の学校を対象に、授業のアポ取りから一人で開拓し始めた。ボツワナでは、ごみの分別収集はほとんど行われていなかったため、阪上さんは、なぜごみのポイ捨てがいけないのか、なぜ分別が必要かを説明することに力を入れた。捨てられたごみが分解されるまでの期間を、バナナの皮、新聞紙、缶、ペットボトルそれぞれについてどれくらいの期間が必要かを具体的に説明した。小学生が理解できるように、絵カードを使い、英語に加えてツワナ語でも説明した。

「あなたが今、空き缶を捨てたら、あなたが大人になっても、そのまま残っているのよ、と話すと、子どもたちは

驚いて、納得しました」

ボツワナでは、教員が一方的に説明する授業が多かったが、「授業中に手を挙げて意見を言ったり、生徒たち同士で議論したりする形式も取り入れました。子どもたちには新鮮だったと思います」。

担任の教員たちは、自分が教えずともいいという状況になると、スマートフォンを操作して大きな音で音楽をかけたがり、教室を出て行ったりしてしまった。「そこで、私が授業しているところを写真や動画で撮影してほしいと伝え、先生にも役割を持って授業に参加してもらうようにしました」。

各校とも1学年3〜4クラスあり、午前と午後で生徒が入れ替わる2部制の学校も多い。1日に4〜6コマの授業をしても終わらないので、また別の日にも訪れて全クラスに教えるようにした。このようにして計18校を回った結果、阪上さんが教えた生徒は約5500人になった。

最初は緊張していた子どもたちも、別の学年を教えるために再び学校を訪れた時には、阪上さんの周りに集まり、教えた「こんにちは」という日本語の挨拶で話しかけてきた。町を歩いている時も、授業を受けた子どもから、「ごみのこと教えてくれたね。私のこと覚えている?」と話しかけられることもあった。

ボツワナの人と仕事をする上で少し

ピザ店の立ち上げに向け窯を手作り 協力者が増え物作りの喜びを実感

地域で小規模ビジネスを行っている住民グループの支援に取り組んでいるのが、2022年11月に着任したコミュニティ開発隊員の吉田晃子さんだ。

配属先はマハラペ県庁。同県はハローネと第2の都市フランシスタウンを結ぶ道路の中間に位置する町。ボツワナは都市部と村落部での経済格差が大きい。そのため、地方の活性化が課題となっている。同県庁でも住民の生活改善を目標に、グループの商品開発や販路拡大をサポートできる隊員を要請した。しかし、赴任当初の吉田さんは意外な現実と直面した。

「数年前に作成されたリストには、約100グループが載っていました。でも、実際に調査した結果、活動を継続しているグループはほとんどありませんでした」

吉田さんは、支援対象のグループを自分で探そうと、配属された地域開発課だけでなく、農業管轄など他部署にも顔を出して広く職員とつながり、職員に紹介してもらった住民に声をかけていった。

新たなグループ支援の一つは、蜂が巣を固める時に出すビー・ワックス（蜜蝋）の利用だ。「養蜂に取り組んでいる人たちに集まってもらった時、ビーワックスは捨てていると聞いて、それでハンドクリームやリップクリーム

を作れないかと考えました」

県庁が月に1回開催している「マーケットデイ」に参加していた食器洗剤を販売しているグループに、「一緒にせっけんを作って売ってみませんか」と声をかけた。ボツワナでは洗髪も含めてせっけんが重宝されており、手作りのせっけんは価格の安さからよく売れるという。

ビーワックスのハンドクリーム、手作りせっけん共に、商品化を進め、今年8月に首都で行われたフェアに出展することを目標に支援を行っている。

現在、吉田さんが最も力を入れているのが、ピザ店の立ち上げだ。

「住民の中に『ピザを作って売りたい』という人が何人もいました。そこで、



ボツワナのダンスの魅力に引きつけられた阪上さんは、ダンスグループに入って現地のダンスを学び、グループでイベントや結婚式で踊った

資本主義の次に来る世界

著：ジェイソン・ヒッケル

訳：野中香方子

発行：東洋経済新報社



<https://str.toyokeizai.net/books/9784492315491/>



いま、 読みたい 電子書籍

この方に
聞きました！



推薦者
ふじかけようこ
藤掛洋子さん ※博士（学術）
パラグアイ／家政／1992年度2次隊・
福岡県出身
横浜国立大学都市科学部長・教授
JICA海外協力隊技術顧問
（家政・生活改善、栄養士、料理）

“豊かさ”とは何かを見直せる本 現地の知恵を尊重した支援のヒントにも

パラグアイOVで、ラテンアメリカを主な研究フィールドとして開発人類学を教える傍ら、家政・生活改善などの技術顧問として協力隊員の支援にも関わっている藤掛洋子さん。お薦めの一冊は、エスワティニ出身の経済人類学者が著した『資本主義の次に来る世界』だ。この本について藤掛さんは、「古くて新しい国際協力の在り方を考えるきっかけになる」と評している。

邦訳版のタイトルからは隊員活動とのつながりを感じにくいかもしれないが、原題の「LESS IS MORE: How Degrowth Will Save the World（少ないほうが豊か：脱成長はいかに世界を救うか）」というテーマは、途上国で現地社会に入り込んで活動している隊員たちにこそ、大いに関わりのある事柄である。

本書では、資本主義が発展する過程で、伝統的共同体が管理してきた土地や水といった資源が収奪され、貧困が生み出され

ていることなどが論じられている。

著者は、経済指標であるGDPの増加だけが希求される仕組みを問い直し、「わたしたちは自ら成長を抑制することを選択しなければならぬ（p.131）」と主張する。そして、クリーンエネルギーなどのテクノロジーが環境破壊などの解決策として効果を発揮するには、自然と人間を二元論的に捉えて「自然は人間に従属するもの」と見なす考え方を改め、資本主義以前のような人間と自然のつながり方への回帰がまず必要なのだと述べている。

「自然との共生を意識し、身の回りにあるものを大切に利用したり自然のものを活用したりする生活は、途上国では普通に根づいています」と話す藤掛さん。「隊員時代、私が料理を教える講習会で皿を忘れて困っていたところ、現地の方が『ヨウコ、大丈夫だよ。バナナの葉っぱがあ

るからそれを使おう』と対応してくれて感動した思い出があります。この本を読んで任地に目を向けると、現地の文化や暮らし方に特別な価値を見いだせるかもしれません」

自分たちが一方的に教えるのではなく、現地の人々の知恵や文化、経済システムを尊重した支援を行うこと。そして、既存のものを根本から変えてしまう“開発”ではなく、むしろ生かして課題解決に向かう“改善”に取り組むことは、古くから協力隊員が実践してきた手法である。「この本を読むと、協力隊的な国際協力が今、新たに求められているのではないかと感じられます」。

途上国で暮らして活動する中で、「豊かさとは何か」「先進国のやり方を伝えることが正しいのか」という問いが、しばしば頭に浮かぶこともあるかもしれない。本書は、そんな漠然とした疑問を具体化して整理し、再考するヒントになる一冊になるだろう。

ピザ店オープンを目指し、ピザ作りのワークショップを行う住民たちと吉田さん



活動の舞台裏

ピースジョブとイペレヘン

ボツワナは人口が少ないことを主な原因として、若者の就労機会が乏しいことが大きな問題となっている。そんな状況の中、コミュニティ開発隊員として活動中の吉田晃子さんが感心したのが、「ピースジョブ」の習慣だ。

ピースジョブは、ボツワナで一般的に行われているアルバイトのようなもので、家事や子守り、洗車、大工仕事などを対価を支払って依頼する。契約は個人間だが金額や内容はだいたい決まっている。誰にでも頼めて、友人や同僚にも気軽に頼んでいる。



吉田さんはピザ窯を造る際に、一部の作業をイペレヘンを利用して手伝ってもらった

吉田さんは最近、現地の人に「お金を貸して」と言われると、「じゃあ、ピースジョブで私の靴を洗ってくれる?」などと聞くようにしている。貸し借りのトラブルもなくて気楽だという。

また、ボツワナ政府が貧困対策に行っている「イペレヘン」は、地域清掃の仕事を住民に委託する事業で、平等に仕事を配分できるように、請負人の選定はくじ引きで行なわれる。月に6,000円くらいの収入が得られる。

吉田さんは配属先を通じて依頼し、ピザ窯造りにイペレヘンを利用した。レンガや大きな材料を運んでもらったが、「仕事を請け負う人たちが若い人ばかりだったので驚きました」。

ピザ店開店に向けたワークショップを行いました。ところが、全然動きだしてくれないのです。理由を聞いてみると、理由の一つがガスオーブンを購入したいが高価からできないということでした。そこで、やるなら本格的なピザ窯を造ろうと考えました」

開店する場所は県庁管轄の大きな市民ホールのスペースを借り、ピザ窯はすぐ裏の屋外に設置する方針にした。「皆で相談して、身近で手に入る材料で造ることにしました。廃材置き場に行き、バス停の屋根や捨てられた窓枠、看板など使えそうなものを入手。窯の

煙突にはバス停の支柱がぴったりでした。壁などに使う砂は、県庁の道路関係の部署から余っている砂をもらいました。買ったのはセメントとブロックだけで、材料費は2万円以下に収まりました」

吉田さんは当初、もし誰も手伝ってくれなくても、自分で窯を造ろうと考えていた。「ところが、実際に造り始めると、他の人たちの協力が必要になりました。溶接技術がある人が必要だったし、壁を造るのには地元の大工さんが協力してくれました。どんどん協力者が増えて、いろいろなアイデアが

出ました。煙突の位置、セメントと砂の配合のアドバイスなど。助け合いのうねりが生まれ、皆と一緒に取り組む物作りの楽しさ、喜びを感じました」。

ピザ窯として造っているが、「パンを作りたい」という声も上がった。「ピザでもパンでもいいので、安価な地元の農産物に付加価値をつけて売る体験をしてみようことが目的です。お店でも、イベントへの出展でも、材料費や収益などの計算もできるようになって、成功体験につなげてほしい。それが残された数カ月で実現したい目標です」

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ

今月のお悩み

私が話したことが噂で広がる一方、
住民の意見がわからないため
課題への取り組み方に困っています

(日系J/V／女性)

私が任地の日系社会で話したことを、別地域の日系社会の人が知っていました。また、他の人から「あなたはあの人と仲がいいのね」と否定的な意味合いで言われたこともあり、誰と誰がつながっているのか、どこで噂が広がるのかわからず、混乱してしまいます。

一方、ワークショップを行って住民から意見を募っても、あまり積極的に話してくれませんが、住民が困っていることや希望していることがはっきりせず、課題をどう設定してよいかわからずに困っています。

今月のテーマ…任地の人間関係を把握する

稲葉先生
からの
アドバイス

同じ地域だから皆の意見が同じで
住民同士で仲が良いとは限りません
そこを意識しながら
人間関係を把握していくことが大切です



任地のコミュニティ内の人間関係は活動に影響しますから、地域の人たちとどう関わるかを考えることが大切です。別の地域の日系社会の集団同士に限らず、小さな村一つの中にもいくつもグループがあることもあり、活動を進めながら人間関係を把握していきましょう。

私の隊員時代にも、人間関係の把握が大切と痛感した出来事がありました。村落開発普及員としてセネガルに赴任した私は、まず活動先の村の人々に集まってもらい、何に困っているか、村をどうしていきたいか、ワークショップで自由に意見を話してもらった場を設けました。

ところが、最初に村長が「村の課題は、学校がないことと井戸がないことだ。さらに病院も必要だ」と言うので、後に続く人たちは「私は村長の意見に賛成だ」という言葉しか出てきませんでした。村一番の権力者である村長に対して、違う意見は言えない様子でした。「これは失敗した!」と思い、みんなで話すワークショップはやめました。代わりに始めたのが、

村の全家庭を個別訪問することでした。朝、村に着いたら、まずは村長の家に挨拶に行き、次に女性グループのリーダーの家、と村の秩序を崩さぬよう、偉い人から順番に会いに行きました。多い村では約50軒、少ない村で9軒。その9軒でも約100人の村人(うち約60人は子ども)がいます。挨拶して回るだけで課題に思っていること、やりたいと思っている本音を知ることができました。効率は悪いけれど、建前ではない個別のニーズを聞くことができました。

また、個別訪問を通じてそれぞれの経済状況や家族関係がわかったことも収穫でした。セネガルは一夫多妻制なので一軒に奥さんが2人も3人もいて、さらにその子どもたちもいるので家族の把握も大変でしたが、訪問するたびに、外で会ったこの子はこの家の子だったのかとか、兄弟姉妹、親戚といった関係がわかってきます。始めのうちは皆が同じ顔に見えてよく間違えました。が、メモを取りながら地道に覚えていきました。

別に対立しているわけではないので気づきにくいかもしれませんが、親戚関係や民族、宗派などで自然と出来上がっているようにでした。

そのことに気づかないと困ったことも起こります。例えば一つの村でセミナーを開いて指導したから次の村に行けばいいと予定を立てていても、同じ村でグループが違っていると参加しないので、「他のグループばかり教えて、なぜ私たちのところは来ないの!」と怒る人たちが出てきますから、注意が必要です。

相談者さんの場合は違う地域の日系社会とのことです。が、たとえ同じ地域でも、それが一つのグループとして全員の仲が良く、逆にも限りませんし、今回の相談のように、別の地域の意外な人となりがついていることもあるでしょう。特定の人やグループの意見だけを聞いて、わかったつもりになってしまいうことにもなりかねませんから、手間はかかっても、一家庭ずつの単位で話をして信頼関係を築き、任地の人間関係を把握していくことも大事だと思います。

一旦、私の中に全部の情報や意見を入れた状態で、皆が共通して抱えている課題を整理しました。その上でワークショップを開けば、「こんな意見がありました」と私が発表を始めて、それを呼び水にして話し合ってもらうことができます。少数の意見も私が代弁することで、みんなに伝えることもできます。

井戸端会議もお金の貸し借りも、グループ内で行われません。そんなグループが大きい村にもなると八つもありました。

また、個別訪問を通じてそれぞれの経済状況や家族関係がわかったことも収穫でした。セネガルは一夫多妻制なので一軒に奥さんが2人も3人もいて、さらにその子どもたちもいるので家族の把握も大変でしたが、訪問するたびに、外で会ったこの子はこの家の子だったのかとか、兄弟姉妹、親戚といった関係がわかってきます。始めのうちは皆が同じ顔に見えてよく間違えました。が、メモを取りながら地道に覚えていきました。

今月の教える人 稲葉久之さん

(セネガル／村落開発普及員／2004年度3次隊、ブルキナファソ／村落開発普及員／2008年度9次隊、2009年度9次隊-大阪府出身)
フリーランス・ファシリテーター。JICA海外協力隊環境教育職種課題別派遣前訓練講師。愛知淑徳大学、金城学院大学、日本福祉大学、南山大学の非常勤講師。特定非営利活動法人アイキャン理事。学生時代に国際開発学を学び、卒業後、出版社などの勤務を経て、協力隊に参加。帰国後はJICAの国内研修のコーディネーターを務めた後、2008年から大学院でファシリテーションを学ぶ傍ら、協力隊の短期ボランティアにも参加。大学院修了後は自治体のまちづくりなどに携わるようになり、17年にフリーランスのファシリテーターとして独立した。



25の保育園を巡回。保育士に「遊びを通した学び」の実践を伝える

はしもと ちづる
橋本千鶴さん

エジプト／2019年度2次隊、2022年度7次隊
・神奈川県出身



PROFILE

短大保育科の恩師が協力隊のシリアOVだったことから協力隊を志す。保育士として東京都内の保育園に5年勤務後、都職員として協力隊に現職参加。コロナ禍により派遣から3カ月で帰国し、復職。2022年6月に同じ配属先に再赴任し、24年7月まで活動した。

配 属 先：社会連帯省ポートサイド支局家族・子供部

要請内容：「遊びを通した学び」の普及や保育士の育成を図り、地域の保育の質を底上げすることに寄与する。JICAの「就学前の教育と保育の質向上」プロジェクトが実施されており、その効果を持続・発展させることも期待される。

この職種の先輩隊員に注目！ 現場で見つけた 仕事図鑑

#0034

「幼児教育」

分 類：人的資源

派 遣 中：20人(累計:939人)

類似職種：青少年活動、学校教育

※人数は2024年6月30日現在

日本の保育の普及から、絵本寄贈、遊具建設、劇による衛生教育まで幅広く活動

に しな じゅん き
仁科潤紀さん

ブルキナファソ／2017年度2次隊・静岡県出身



PROFILE

静岡県内の保育園に保育士として5年勤務した後、協力隊に参加。ブルキナファソでは政情悪化に伴い任期3カ月を残して活動終了。現在、静岡県内の保育園に勤務する傍ら、「いわとじゅん」名義で絵本を作り、途上国の子どもたちに届けるプロジェクトも行う。

配 属 先：カディオゴ県事務所

要請内容：首都近郊の小都市の公立幼稚園を拠点に、子ども中心の教育が実現できるよう、保育の現場に子どもの発達段階に応じた保育や遊びを通した能動的な学びを定着させ、子どもが楽しみながら学べる教材や活動の開発・普及を図る。

最大のピンチ

カウンターパートはポートサイド支局家族・子供部で管轄下の全保育園の管理を担当していました。以前から幼児教育隊員を受け入れていたため活動にも理解があり、かつ日本での研修も受け、保育の質の向上にも積極的に取り組んできた人です。私を信頼してくれ、私も常に巡回先の園の状況について相談していたので、今年1月に彼女が入院し2カ月ほど不在になった時は、「私は誰に活動について相談すればいいのだろう」と不安になりました。

待機中も活発に活動しモチベーション維持
派遣中は意識改革の難しさに悩む

幼児教育隊員の多くが地方の教育事務所に配属され、幼児教育の質の向上のため、日本の幼児教育の特色でもある「遊びを通した学び」を推進する。幼稚園や保育園を巡回し、活動改善、教材作成、セミナーの開催などに取り組む。教員養成学校での学生への指導が求められる要請もある。

CASE 1

エジプト派遣から約3カ月でコロナ禍による一時帰国となった橋本千鶴さん。2年3カ月にわたる待機中は各国の子どもに関わる隊員有志と教材研究分科会を立ち上げ、エジプトの保育士向

けに知育玩具、遊び、食育などの資料をまとめ、アラビア語の字幕や説明をつけてSNSで発信した。OV会「JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク」のオンライン勉強会にも積極的に参加するなど、モチベーションを保ち続けた。再赴任後は25の保育園を巡回し、遊びを通した学びの普及活動を行った。保育士たちは、保育園は読み書きの基礎とコーランを学ぶ場と捉えて育つため、幼児の発達に遊びを通した学びが必要という意識をなかなか持つてくれなかった。橋本さんは、文字、言葉、数字などエジプトの保育園教育に近い「勉強に直結する遊び」ならば受け入れられやすいことに気づき、園にある教材を活用したカルタ遊びや段ボールで作

最大のピンチ

体罰について管轄省庁に訴えた時、同僚たちとの関係が壊れることは覚悟していましたが、小さなコミュニティなので職場だけでなく任地の飲み仲間からも「村八分」にされて精神的につらかったです。同僚とはそれまで仕事に意見がぶつかっても就業後には仲良く飲みに行っていましたし、彼らを通じて任地の人たちが私によくしてくれました。関係悪化後も折を見て園に顔は出しに行き、国民教育・識字省からのフォローもあったことで徐々に関係が戻り、帰国時は送別会を開いてくれるまでになりました。

最高のやりがい

活動の終盤頃、巡回先の先生の一人が私に、「次にどんな遊びをしたらいいか」「どんなおもちゃを作ったらいいか」と保育について一生懸命に質問をしてきたんです。「あなたはもうすぐ帰っちゃうから今のうちに聞いておかないと」と言ってくれました。活動当初は「子どもと遊びに来た人」として扱われていたのに、2年たって、私のことを専門的知識を持った人として受け止めてくれていると感じることができて嬉しかったです。



巡回先の園で子どもたちと過ごす橋本さん。「ご飯とトイレ、勉強以外は、子どもたちは何もせず座って待っているだけ」という保育園が多くて、『いろんな経験をさせてあげよう』と先生たちに働きかけました」

帰国

終盤

終盤

赴任

体罰を巡り同僚と対立するも
持続性のある遊具を残す

CASE 2

仁科潤紀さんは、ブルキナファソ首都近郊の小さな市の公立幼稚園に新規派遣され、その園を拠点に近隣の私立園も巡回した。
任地では幼児教育は小学校入学の準備期間という認識が強く、子どもを席に座らせて公用語のフランス語を教え

ることが中心だった。仁科さんは、遊びを通してフランス語を楽しく学べることを伝えたが、保育士は必要最小限の授業しかしようとせず、法律で禁止されている子どもへの体罰も目に余った。仁科さんは職員会議でやるよう何度も働きかけ、園長も指導したが、体罰は変わらなかった。
「目の前の子どもたちへの暴力を止められなかったら、活動の意味がない」。覚悟を決めた仁科さんは、園を管轄する国民教育・識字省に伝えて注意してもらうことにした。結果、体罰はなくなったが同僚たちとの関係は悪化。
そこで仁科さんは活動に興味を示してくれていた私立園を巡回指導しながら、他の隊員と連携し小学校や幼稚園で劇による衛生教育を行ったほか、日本から届けられた絵本の寄贈を行った。
一方、拠点園には嫌われているのは承知で折を見て挨拶だけはしに行った。同僚たちが、子どもが滑り台やブランコなどの遊具で遊ぶ間はちゃんと補助をする姿を見て、鉄棒や雲梯、のぼり棒といった挑戦できる遊具の設置を思い立つ。関係が修復されたタイミングで園と相談して建設を決め、情報を集めて自ら図面を引き、業者と調整して完成させた。「3カ月を残して帰国となりましたが、遊具の研修を行い、設計図や教本を残し、園長会で他の園にも伝えてもらうよう約束しました」。

最高のやりがい

「絵本で繋ぐ、心と心」と名付けたプロジェクトが成功したことです。日本の元勤務先の同僚や保護者の協力で集めた150冊の絵本にフランス語訳をつけ、13校、1,185名の子どもたちに贈りました。本には贈り主の写真とその本を選んだ理由を添えて「こんな人がこんな思いで絵本をくれた」と感じてもらえるようにし、先生たちに読み聞かせの研修を行ってから渡しました。その後、絵本を通じてオンラインでブルキナファソと日本の子どもたちの交流が実現した時には感激しました。



日本から送られた絵本を手にして喜ぶ子どもたち。「任地の子どもたちにとって初めて手にする絵本です。読み聞かせも聞き入ってくれました」

帰国

終盤

序盤

赴任

みんなの教材づくり & アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、
お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

しら い あ な
白井亜奈さん

(ベリーズ／環境教育／2023年度1次隊・和歌山県出身)

大学生の時、ワークキャンプに参加し、フィリピンのごみ山を見学。食べていけるから満足だというごみ山の住民の言葉に、自分の先入観の誤りに気づき、途上国での活動に興味を持つ。卒業して特別支援学校で2年間、高校で国語の教員を5年間務める中で、世界を正しく知った上で生徒に関わりたくて休職して協力隊に参加。ベリーズの町役場に赴任し、主に学校を巡回して環境教育を行っている。



みんなが先生プロジェクトで下級生に環境について教える生徒たち

環境をより深く考えるための
みんなが先生プロジェクト

前号では白井亜奈さんから、子どもたちにごみ拾いを楽しくやつてもらったためのバクバク君と、ごみの分解について教える授業を紹介してもらいました。今回は、白井さんから環境について学んだ生徒たちが、自分が先生になって、下級生に環境について教える「みんなが先生プロジェクト」の進め方を教わりました。

「普段の生活で子どもたちに環境を守る行動をしてもらうには、環境に対する『当事者意識』を持つてもらわなければならない。自分たちが教える立場になれば、そうした意識が高まるのではないかと思う、このプロジェクトを考えました。また、小さい仕事でも自分の役割に責任を持って取り組むことで、ごみを正しい方法で捨てる、という小さなルールも大事にしてくれるようになればと期待しています」

みんなが先生プロジェクトの進め方

「みんなが先生プロジェクト」は、隊員から環境教育を受けた生徒たちが、総復習をし、自分たちの行動が環境に影響を与えているという「当事者意識」を持ってもらうための授業で、生徒たちが先生役になり、下級生に環境について教えるもの。授業のテーマは下記の全3コマ。

- 1コマ目：隊員がクイズを出題して生徒たちが総復習する
- 2コマ目：生徒たちが下級生に教えるための準備をする
- 3コマ目：実際に下級生の教室に行って生徒たちが教える

〝3R、って何？

Question 6

What is "3Rs" ?

- A. Reduce , Read , Reuse
- B. Reduce , Reuse , Recycle
- C. Recycle , Respect , Reuse
- D. Recycle , Response , Reduce

海洋汚染の
主な原因は？

Question 15

What is the main cause of plastic pollution in the ocean?

- A. Land-based waste such as littering
- B. Ships dumping trash into the ocean
- C. Plants and animals in the ocean
- D. Tsunamis, hurricanes, and tornados blowing plastic into the ocean

◀1コマ目授業のクイズ大会での設問の例

2コマ目 準備をしながら学ぼう！

生徒たちが下級生に教えるための準備をする。

まずはクラスが4～5人ずつのグループに分かれ、環境教育の6つのテーマ（下記の表を参照）から、各グループ1つずつ取り組みたいテーマを選ぶ。

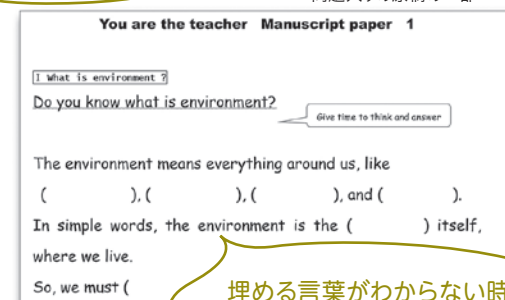
次にグループ内で役割分担を決める。必要な担当は、原稿を作る生徒、ポスターを作る生徒、発表をする生徒、の3種類で、各1～2人が担当する。各担当の作業は次のとおり。

①原稿を作る生徒は、あらかじめ白井さんが用意した穴埋め問題入りの原稿に取り組む。空白部分に当てはまる正解を思い出しながら埋めていき、原稿を完成させる。

②発表担当の生徒は、原稿を基に授業を進める練習をする。原稿はそのまま読むのではなく、どうすれば下級生が楽しみながら授業を受けられるかを相談しながら、クイズ形式を取り入れるなど考えてもらう。先生役と生徒役に分かれて練習もしておくといい。



2コマ目の授業では生徒がそれぞれ役割分担して原稿やポスターなどを作る

責任をもって自分の
役割に取り組んで
もらうことが大事白井さんが用意した穴埋め
問題入りの原稿の一部埋める言葉がわからない時は
説明を書いた文章を渡して
そこから答えを探してもらいます

③ポスターを作る生徒は、教えたい内容をすべて書くことと情報が多過ぎるため、大事だと思う言葉だけを選んで書くようにする。また、必要に応じてイラストなども描いて、下級生が見てわかりやすいポスターを作る。

環境教育の6つのテーマ

- 1 自然環境について知っていますか？
- 2 〝3R、とは何でしょうか？
- 3 私たちは 〝3R、のために何ができる？
- 4 〝分解、について知っていますか？
- 5 〝海洋プラスチックごみ、について
- 6 私たちが出したごみはどこに行く？



生徒たちによる下級生への環境教育は大いに盛り上がった

3コマ目 いよいよ下級生に環境教育！

下級生の教室に行って、各グループが順番に発表する。発表担当の生徒が中心となって説明し、ポスター担当の生徒はポスターを持って発表に合わせて指さしするなどして補助する。

授業にはクイズを取り入れると下級生が楽しめる。出題する時は、考える時間を与えてから、わかった子に手を挙げてもらって当てる。手が挙がらなかった時は指名して答えてもらうようにする。

1グループの発表が長くな
らないように時間配分も大事。
発表用の原稿は1分くらい
で読める長さが適切

シュエカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

中学生の頃から体育教諭になることが夢だった浦田悠理子さん。カンボジアで教師をしている日本人をテレビで見たのがきっかけで、途上国の教育に携わりたいと思うようになり、大学卒業後に協力隊に参加した。

「日本の教育現場を経験してから参加することも考えましたが、学校以外の世界を知ってから教諭になったほうが子どもたちに伝えられることが多いと思います、在学中に応募しました」

モンゴルでは、主に小学生の体育の授業を担当したが、授業はほぼ自由時間という受け止められ方で、浦田さんの指示を聞いてくれない子もいた。先生たちからは「モンゴルの子どもはルールを守らないから教えても無理」と言われ、積極的な協力姿勢はあまり期待できなかった。浦田さんは、「子どもたちは絶対にできる、やっていだけ。楽しい授業をして、しっかり教えれば、ルールを守って体育に取り組める」と先生たちに言い続けた。

1年目に運動会を開催すると、子どもたちの成長にモンゴル人の同僚教員も関心を持つようになり、浦田さんと一緒に体育の授業を行い、浦田さんからのフィードバックを聞いてくれる関係になった。

任期中、ケガで一時帰国をした際には欧米のスポーツ教育学も学んだ。帰国後は広島大学大学院人間社会科学研究所に進学。スポーツ教育や日本の体育教育について知識を深めたいと思ったからだ。2021年度から始まった「JICA海外協力隊帰国隊員奨学金事業」を活用することができた。

現在、中学校の体育教諭として、子どもたちと向き合う毎日を送っている。協力隊経験者の中には国際関係の仕事に就く人も多く、なぜ教師を選んだのか聞かれることもあるという。

「私一人がボランティアに行っても小さな力ですが、私の経験を聞くことで国際協力に興味を持つ子どもが増えていったら、それは未来に向けて大きな力になるはずです」

教育者として子どもたちに海外での経験を伝えること。それが浦田さんのやりがいになっている。

現在の仕事

大阪市の中学校で、週に18時間、保健体育を担当しています。生徒たちに体育を嫌いになってほしくないので、授業では楽しいと思える体験、仲間と関わり合う機会をつくることを意識しています。運動能力は人それぞれ違うため、例えば50メートル走であれば、タイムではなくスタートや走り方が正しくできているか、倒立であれば、補助倒立、壁倒立など、それぞれのレベルに合わせて達成度を評価し、各自が達成感を得られることを大切にしています。また保健の授業では、日本とアフリカの平均寿命から医療を考えるなど、国際関係を絡める工夫もしています。



大学院で行った研究成果をマレーシアでの国際学会にて、英語のポスター発表で報告した浦田さん。「さまざまな国の人たちと交流して楽しく過ごしました」

後輩へメッセージ

帰国後に学校などで講演を行うと、進路について助言を求められることがありますが、私はいつも、迷った時には自分がワクワクするほう、可能性がより広がるほうを選んではどうかと伝えています。私自身、進路に迷った時にはそうしてきました。大切なのは、決めたのは自分だと腹をくくり、ひたすら頑張ること。頑張った結果、思いどおりにいかずに失敗したとしたら、別の方法を考えればいいのです。やり直しはいつでもできます。

3 広島大学大学院に進学 2021年4月

帰国後に日本の体育教育を学び深めたい気持ちが高まりました。同時に、体育教諭の経験を生かして、将来は国際機関で活躍したいという夢もあり、体育教育と国際協力の両方を学べる広島大学大学院へ21年4月に進学しました。担当教授は協力隊の技術補完研修で教わった齊藤一彦先生で、スポーツ教育学とスポーツ国際開発学を研究されています。入学後に「JICA海外協力隊帰国隊員奨学金事業」(*)を知り、給付を受けられたので金銭面で助かりました。

4 大阪市教員採用選考テスト受験 2021年7月

大阪市の教員採用テストを受けました。大学院に在籍しながら受験をしたのは、講師をしている間は1次の筆記が免除され、採用試験に合格して大学院に進学した場合は、2年以内であれば次の採用試験は1次の筆記と2次の筆記・実技が免除になり、2次の面接のみでよいという大阪市の特例があったためです。

5 大阪市教員採用選考テスト最終面接 2023年8月

面接では、協力隊、非常勤講師、大学院、フリースクールのスタッフと経験した中で、一番印象的なことは何かを聞かれました。特にフリースクールでの経験に関心があったようで、不登校の子どもへの指導方法を聞かれました。私は学校がすべてとっていないので、その子が居場所を見つけられるように手伝えたいと答えたことと記憶しています。

2023年10月 合格通知

6 大学院を卒業 2024年3月

大学院では、日本の体育教育やコーチングの仕方、スポーツの持つ可能性について深く考えることができました。学会発表や論文投稿、海外調査などさまざまな経験ができたことで、論理的思考力や批判的思考力、資料を簡潔にまとめる力がつきました。なによりも広く人脈ができたことが大きな財産となりました。

1 協力隊時代 2018年7月～20年3月



浦田さんは子どもたちが楽しみながら運動ができるように授業を工夫した。モンゴルでは寒気のため1年の半分ほどは外に出ず体育館で体育の授業を行う

生徒数約1,800人の小中高一貫の学校に体育隊員として配属され、主に小学生と中学生、特別支援学級の生徒の授業を担当しました。しかし、体育の授業は自由時間のようなもので、教員はそれを放置しているという状況で、私が赴任すると、教員は私に任せて授業に出てこないこともしばしばでした。そこで、運動会を開催するという目標を立て、それに向けて運動会の種目を取り入れながら授業を進めました。協調性を育むため、種目には二人三脚、ボール運び、台風の目など、2人以上で行う競技を選びました。運動会の後に同僚の教員にアンケートを取ったところ、「子どもたちに成長を感じた」という回答があり、その後は同僚の体育教員も積極的に関わってくれるようになりました。2年目は同僚に運動会の種目を考えてもらおうと計画していたのですが、コロナ禍により緊急帰国となってしまったのが残念です。

2 中学校の非常勤講師など 2020年12月～

大学院進学の前年の20年12月から、大阪市の中学校で体育の非常勤講師を務めました。大学院入学後もリモート授業を受けながら大阪で非常勤講師を続け、21年9月に広島に引っ越ししました。広島では22年1月から約1年間、不登校の中高生が通うフリースクールでも体育を中心に自主勉強をサポート。23年4月に大阪に戻り、再びリモートで授業を受けながら大阪府の高校で非常勤講師として働きました。大学院での研究者の立場と現場の教員の立場を行き来できたことは、理論と実践が体験でき、とても有益なことでした。

協力隊を経験して 体育と国際協力を より深く学びたいと 大学院へ進学



今月の先輩

浦田悠理子さん Yuriko Urata

モンゴル／体育／2018年度1次隊・大阪府出身

就職先：大阪市の公立中学校

浦田悠理子さんの略歴：

1994年 大阪府生まれ
2018年 3月 神戸大学卒業
2018年 7月 協力隊員としてモンゴルに赴任
2020年 3月 コロナ禍のため一時帰国
2020年12月 大阪市の中学校で非常勤講師として勤務
2021年 4月 広島大学大学院入学
2022年 1月 フリースクールで体育を教える
2024年 3月 同大学院修了
2024年 4月 大阪市の教諭として公立中学校で体育を教える



JICA海外協力隊ウェブサイト

「進路開拓支援のご案内」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

派遣から 始まる 未来

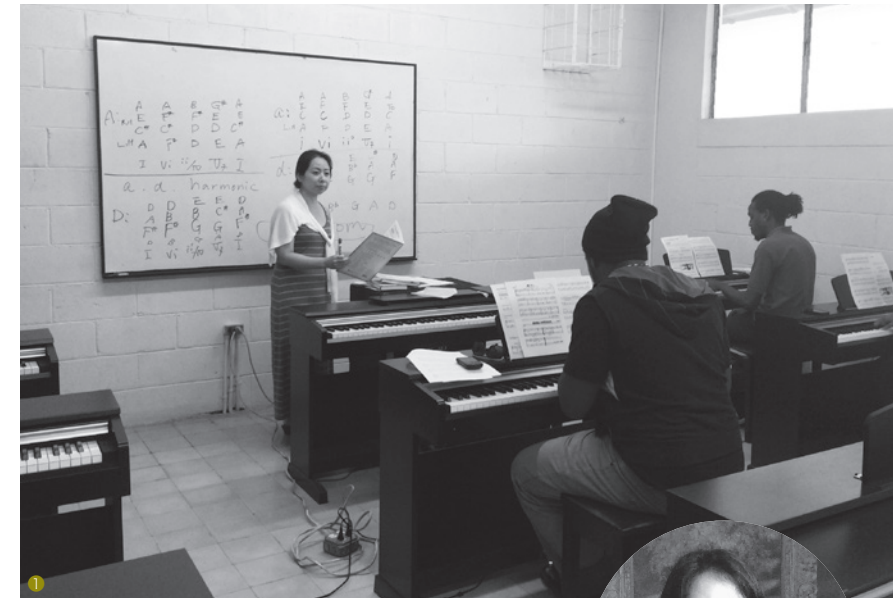


進学、非営利団体入職や
起業の道を選んだ先輩隊員

▶ 音楽やアートを切り口に
NPOを設立・運営

吉田佳代さん Kayo Yoshida

チュニジア/音楽/2012年度2次隊、
SV/ジャマイカ/音楽/2015年度2次隊・東京都出身



- ① ジャマイカ派遣時代、キーボードのグループレッスンをする吉田さん
- ② 大三島で実施したイベント「しまなみアートファーム アフリカとのきずな編」の様子
- ③ しまなみアートファームの活動でジンバブエに中古の鍵盤ハーモニカを届け、国立大学の音楽科で研修を実施。今年11月にも第4弾の寄贈を行う予定

音楽が社会に与える影響を信じて 瀬戸内海の島から世界とつながり、社会に貢献する

私が愛する音楽と音楽家たちをいろいろな人に知ってほしい。そして、今までとは異なる視点を持つきっかけにしてみたい、よりよい社会をつくっていききたい――。瀬戸内海の島々を結ぶしまなみ海道が通る愛媛県今治市の大三島で、地道かつ壮大な構想のNPO法人、「しまなみアートファーム」を設立した吉田佳代さん。その原点には、協力隊での体験がある。

「派遣前訓練でさまざまな分野のエキスパートの同期隊員と知り合うことができ、任地では厳しい状況を一緒に乗り越えたりして絆が深まりました。それまで音楽にどっぷり浸って生きてきた私が、他の専門分野や興味関心を持つ人たちと親しく接して共に何かに取り組む楽しさを知ったのです」

東京で生まれ育った吉田さんは音楽大学でピアノの演奏を学び、ジャズに感銘を受けて渡米。十数年間アメリカで音楽関係の仕事が続けた後、協力隊に応募してチュニジアに赴任した。

「イスラム圏に住むのは初めてで、女性蔑視や外国人嫌いの方の存在に直面した一方、温かい人情にも触れました」

吉田さんは文化省付属の音楽・ダンス学院で小学生から大学生までの年齢層にピアノを教えた。成果とやりがいを感じて帰国し、シニア海外ボランティアとして再度チュニジアで活動する予定だった。しかし、情勢不安のため要請自体が白紙になってしまった。

「代わりの派遣国として提案されたのがジャマイカです。経済的には厳しい小国ですが、レゲエで世界中に影響を与えています。そんな国を内側から見られることに強く引かれました」

今度の配属先は現地の音楽大学。すでにプロのレゲエミュージシャンとして活躍しているような人が学位取得を目指して通っており、意見の違いから、たくさん衝突も経験した。

「私が音楽の基礎や体系的知識を教えると『あなたは私たちのスピリッツを殺そうとしている』と言われる、技術の必要性を言い返したりする日々でした。実際、レゲエは世界中に広まっていて、世界基準の技術や知識がなければ、その業界の中で太刀打ちできません」

音楽が生活そのもののような国での暑い日々が気に入り、任期を延長して3年間過ごした吉田さん。計5年間の協力隊経験で物事の見方が大きく変わったと振り返る。

「上から目線で演奏法を教えればいいわけではありません。文化的な背景を含めて広い視点で相手を理解することの大切さを知りました。音楽が果たす社会での役割など、私の音楽への認識に深みを与えてくれました」

ジャマイカからの帰国後、吉田さんはイギリスの大学院に留学し、音楽開発学の修士号を取得して日本へ戻ったが、コロナ禍が始まっていたため、一時避難のつもりで東京から大三島に移

り住んだ。「ジャマイカのように海の風を感じられるところがいいなと思って選びました。地元の人たちも優しく面倒を見てくれて暮らしやすく、今は80万円で広い古民家を買って住んでいます。周囲に家がないので自宅でミニコンサートもできます」。

自らはオンライン音楽教室「ミュージッキング」の講師や瀬戸内海各地での演奏活動などで生計を立てる一方、今までの学びの実践の場としてしまなみアートファームを設立。地域でアートや異文化理解に関わるイベントを開催するほか、イギリスの大学院時代の同窓生である音楽家と共同でジンバブエの音楽教育を支援するなど、国際協力にも取り組んでいる。

その活動には音楽だけでなく環境教育や農業など各種分野の人が参加しているのも特色で、例えば、島の問題であるイノシシの被害について、研究グループと共同で生態調査を報告する市民交流会なども企画している。吉田さんが隊員時代に得た「専門分野の垣根を越えて協力する」経験が生きている。「2024年1月には、インドのスラムに住む子どもたちに音楽を教えるドキュメンタリー映画の上映会を開きました。現代インドのカーストに関する研究者による講義つきです。一過性のイベントにするのではなく、学びを深められるように心がけています」

音楽を起点に世界各地で活躍してきた吉田さん。今、日本の地方である大三島から海外とつながり、その経験と能力を社会に還元している。

吉田さんの歩み

1972年、東京都品川区生まれ。昭和音楽大学器楽学科ピアノ音楽コース入学。



学生時代にインドで1か月間過ごす機会がありました。現地の音楽にどっぷり浸り、西洋以外の民族音楽に目覚めました

1999年、アメリカ・ボストンのパークリー音楽大学演奏学科に入学。ジャズや作曲、編曲を学ぶ。



ジャズの起源はニューオーリンズの黒人奴隷たちの音楽で、それが多様な文化を取り込みながら発展しています。特に洗練された即興演奏の方法と技術に興味を持ちました

2003年、ボストンからロサンゼルスに拠点を移し、10年間ピアノ演奏活動とピアノ教室運営を行う。

2012年、協力隊員としてチュニジアに赴任。



アメリカに長く住んでいて世界を見ているような気がしていましたが、大きく文化の異なるチュニジアに住んでそれは間違いだったと知りました

2015年、シニア海外ボランティアとして、ジャマイカのエドナマンレー芸術大学音楽学部配属。



音楽は、日本では単なる娯楽やBGMとして扱われがちですが、生活環境が厳しい社会ほどその存在は重要です。人々に希望を与え、時には世の中を変える原動力となるのです

2019年、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院音楽学部の音楽学科修士課程に入学。20年に修士号を取得。

2021年、大三島にてしまなみNPO法人アートファームを設立。



アートを切り口にして地方活性化、環境保全、国際貢献、国際交流・異文化理解促進を目指すNPOです。世界中の人々が共存できる生き方を模索しています

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

PROGRAM

「世界の笑顔のために」プログラムの物品提供者を募っています！

「世界の笑顔のために」プログラムの参加申し込みを、9月2日～10月2日に行います。本プログラムは、開発途上国で必要とされている、スポーツ、日本文化、教育、福祉などの関連物品を日本国内の一般の方からご提供いただき、JICA海外協力隊や在外事務所を通じて、現地の人々へ届けるプログラムです。寄贈品が各国に届くと、現地の人々から物品提供者へお礼状が送られます。お礼状を通じて、世界を知り、世界の笑顔が身近に感じられるプログラムになります。

昨年度は、個人や団体から、スポーツ用品や教材、楽器、玩具、福祉関連用品

品などさまざまな物をご寄贈いただき、世界40カ国の希望者の元へ届けることができました。今年度も多くの方にご参加いただけるよう、ぜひお知り合いの方にもお声がけください。



<https://www.jica.go.jp/activities/schemes/partner/smile/index.html>

MEDIA

青年海外協力隊事務局Instagramフォロワー1万人突破！

青年海外協力隊事務局の公式Instagram開設から1年、フォロワー数がついに1万人を達成しました！募集や派遣に関する情報、それに伴う協力隊Q&A、派遣国の現役隊員と事務局をつないで活動を紹介するインスタライブ、帰国後も活躍されているOVの動画などなど、JICA海外協力隊ならではのコンテンツが盛りだくさんです！現役隊員の方はもちろん、OV、協力隊参加希望者、海外に興味のある方など、どなたでも楽しんでいただける内容となっています。



今後も、JICA海外協力隊の魅力や活動の様子を伝えるコンテンツを目指していきます！フォローされていない方はぜひフォローをお願いいたします。

今後、JICA海外協力隊の魅力や活動の様子を伝えるコンテンツを目指していきます！フォローされていない方はぜひフォローをお願いいたします。



JICA_KYORYOKUTAI

REPORT

第1期 JICA BLUE起業伴走プログラム卒業発表会を開催

7月27日にJICA BLUE起業伴走プログラムの卒業発表会が開催され、選抜された24組がビジネスプランを発表しました。本プログラムは、協力隊出身者が、ビジネスのプロたちとのブラッシュアップ会や仲間との討議、第一線で活躍する起業家による起業講座などを通して、社会課題解決に取り組むビジネスプランを完成させる3カ月間の起業伴走プログラムです。プログラムを終了したメンバーは、今後、起業準備・事業拡大へ向けて羽ばたいていくこととなります。

BLUEのスタートアップハブ（SHIBUYA QWS内）は7月15日に提供を終了しましたが、約4カ月間にわたり、80件以上の起業相談や、数多くのOVの交流の場として利用され、中には、同様の取り組みをしていたOVの方々スタートアップハブで出会って建設的な意見交換がなされた事例もありました。今後もBLUEではOV向けのイベントを複数予定しています。詳細は左のリンクよりご覧ください。



企業伴走プログラムの中間合宿に臨んだメンバーたち



<https://blue.jica.go.jp/>

クロスロード [2024年9月号]

第60巻第8号 通巻700号
発行日 2024(令和6)年9月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会「クロスロード」編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊のウェブサイト
でも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



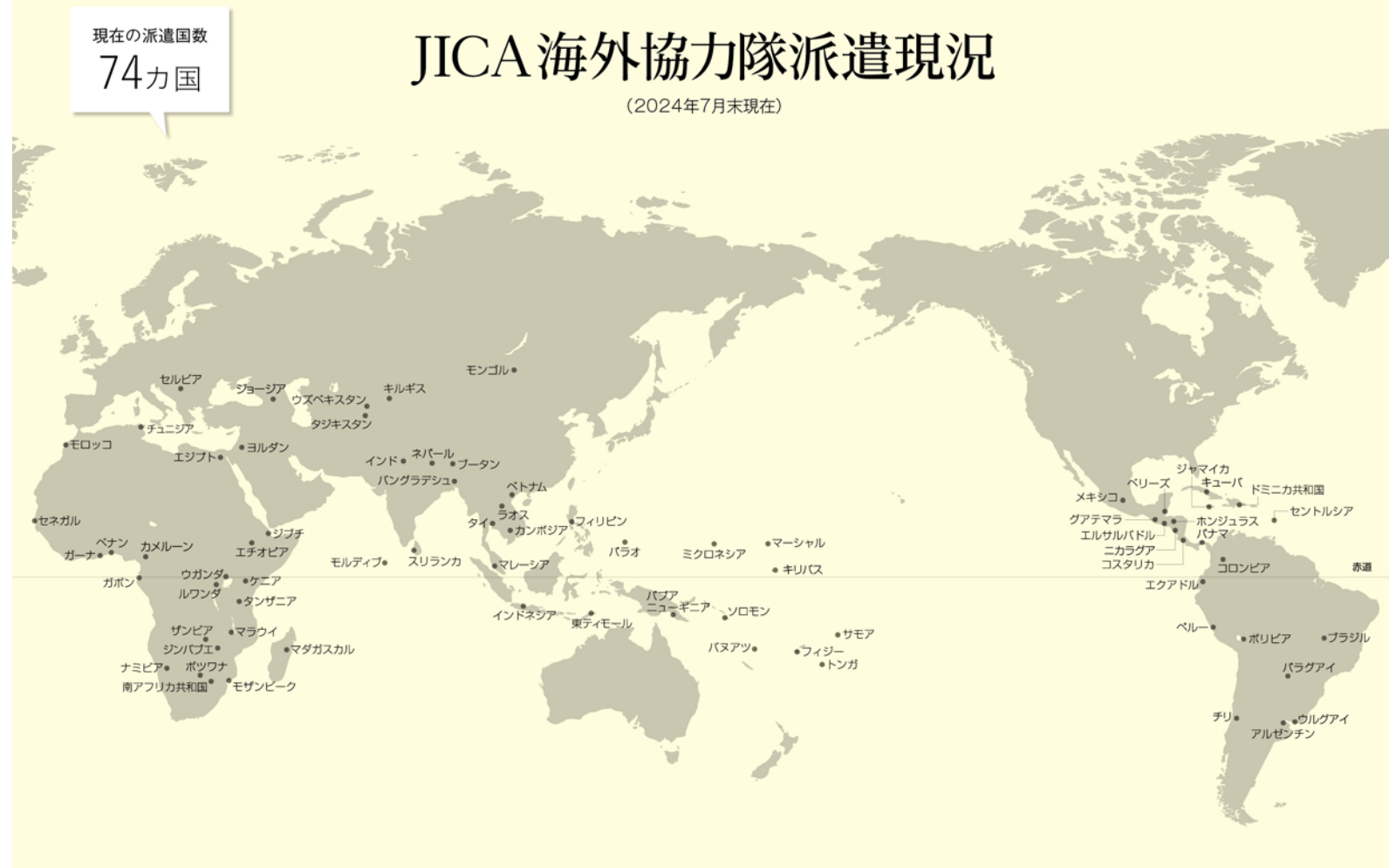
編集後記

「いま、読みたい電子書籍」は今号で終了となります。最終回では、パラグアイOVで開発人類学などが専門の藤掛洋子先生にお薦め本を伺いました。途上国の生活を引き合いにポスト資本主義の在り方が論じられており、現地にいる時こそ読みたい一冊です。（飯淵一樹）

「教材づくり&アクティビティ」では2回にわたってベリーズの白井亜奈さんから環境教育の手法をご紹介いただきました。子どもたちのごみへの理解を深め、さらに環境を守る当事者としての意識も持ってもらう活動に、教育者としての真摯な姿勢を感じました。（阿部純一）

JICA 海外協力隊派遣現況

（2024年7月末現在）



（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	20	2
エチオピア	6	
ガーナ	39	
ガボン	8	1
カメルーン	7	
ケニア	34	
ザンビア	21	1
ジブチ	11	
ジンバブエ	8	
セネガル	30	
タンザニア	16	
ナミビア	9	
ベナン	28	
ボツワナ	25	3
マダガスカル	20	
マラウイ	32	
南アフリカ共和国	4	
モザンビーク	30	1
ルワンダ	34	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	17	
インドネシア	38	
ウズベキスタン	14	1
カンボジア	21	
キルギス	27	
ジョージア	6	1
スリランカ	22	
タイ	24	5
タジキスタン		2
ネパール	2	2
バングラデシュ	3	
東ティモール	22	
フィリピン	7	
ブータン	20	5
ベトナム	40	
マレーシア	19	4
モルディブ	1	
モンゴル	36	5
ラオス	26	2

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	4	
ソロモン	13	1
トンガ	10	1
バヌアツ	12	
バブアニューギニア	8	
パラオ	19	2
フィジー	17	3
マーシャル	3	2
ミクロネシア	1	1

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	28	
チュニジア	11	2
モロッコ	30	1
ヨルダン	19	

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		5	3	2
ウルグアイ		7		
エクアドル	24	2		
エルサルバドル	16			
キューバ		2		
グアテマラ	23			
コスタリカ	13			
コロンビア	17	5		
ジャマイカ	9			
セントルシア	14			
チリ	8	2		
ドミニカ共和国	12	1	5	
ニカラグア	16			
パナマ	8	2		
パラグアイ	18	4	7	1
ブラジル			47	3
ベリーズ	10			
ペルー	32	1		
ボリビア	29	1	1	
ホンジュラス	29			
メキシコ	19	12		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	1,206 (506／700)	92 (73／19)	63 (25／38)	6 (2／4)	1,367 (606／761)
累計 （男性／女性）	47,746 (25,138／22,608)	6,703 (5,413／1,290)	1,624 (627／997)	555 (256／299)	56,628 (31,434／25,194)

一般 = 青年海外協力隊／海外協力隊

シニア = シニア海外協力隊

日系一般 = 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊

日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊

任地の思い出を聞きました。

あの日、

地球の、

あの場所で。

セネガルで食用に
ヤギを飼いました

セネガルの任地・リンゲールでは、
金曜日に家畜市が開かれていました。
イスラム教徒が多く、住民はラマダン
明けにはヤギを、犠牲祭の時には羊を
さばいて食べていました。

羊より値段が安かったこともあり、
任地の隊員間で1人1匹、ヤギを飼う
のがはやっていました。「時が来たら
皆で食べればいいか」と、僕も軽い気
持ちでメスヤギを1匹購入。名前は
「キアメロン」。当時の僕のあだ名「エ
ドウィン」と相性が良さそうと思っ
て、なんとなくつけました。

キアメロンは人見知りが激しいヤ
ギで、最初はおびえていて慣れるまで



Illustration = 牧野良幸 Edit & Text = ホシカワミナコ

2〜3カ月かりましたが、そのうち
餌をあげると、僕の手までめ回すよ
うになりました。家の中で飼う隊員
もいましたが、僕は庭で飼い、外出す
る日中は家の外に放牧していました。
夕方にはちゃんと家の柵の前で待つ
ている、賢い子でした。

「かわい過ぎてとても食べられない
よ!」と思い始めた矢先、キアメロン
が妊娠し、「のんちゃん」を産みまし
た。キアメロンとは真逆のおてんば
娘に育ったのんちゃんは、翌年「アラ
ム」を産み、キアメロンも「マサシ」
を産みました。アラムは人懐っこく、
マサシはちよつとやんちゃでした。

隊員集会などで家を数日空ける時
には柵を閉め、庭に日数分の餌や水を
用意したのですが、帰宅すると、どの
子もぐったり。どうやらヤギたちは
僕の予定など知る由もなく、初日で餌
を食べ切ってしまったというのです。

結果、2年間でヤギ4匹! 餌代は
かさみ続けましたが、どの子もかわい
くて食べることで、後輩隊員
に引き継いで帰国しました。

石川 洗さん JICAデスク佐賀
セネガル/村落開発普及員/2013年度1
次隊、コミュニティ開発/2015年度9次隊、
新潟県出身

教える人
やまざき ゆう が
山崎悠賀さん



ベリーズ/小学校教育/2014年度2次隊・東京都出身
大学卒業後、3年間私立高校で英語を教えた後、ワーキング
ホリデーでカナダへ。飲食店で働きながら、ボランティアで現
地の日本人の子どもたちへの読み書きサポートを行う。帰国後
に協力隊に参加し、ベリーズへ。高校まで吹奏楽でトロンボ
ーンを担当し、趣味でピアノを弾いていた経験から、ベリーズで
は小学校で音楽と英語を教えた。現在は都立高校の英語教師。
趣味はペランダ菜園で、将来的に就農も視野に入れている。



From Belize

夏バテも吹き飛ばす、
酸っぱいスープ
エスカバーチェ

●材料(2人分)

鶏肉(手羽元など
骨つきのほうがおいしい) 250g
塩 小さじ1/2程度
コショウ 小さじ1/2程度
油 適量
水 800ml
チキンコンソメ(キューブ) 2個
ニンニク 2カケ
(あれば) ハラペーニョ 1本

■アドバイス

エスカバーチェは酢を使った酸っぱいスープで
す。本格的に作るとう一度鶏肉をグリルしたりす
る必要があるので、鍋一つで簡単に作れるレシ
ビにしました。
材料は最低限、鶏肉と玉ねぎと酢があれば完成
する料理なので、スパイス類は任地で手に入る
好みのもので構わないと思いますし、量もお好

玉ねぎ 中2〜3個
酢 100ml
トルティーヤ(やわらかいタイプ) 1〜2枚
(スパイス)
オールスパイス(粉) 5振り程度
オレガノ 5振り程度
クローブ(粉) 5振り程度
クミン 5振り程度
(あれば) シナモン 好みの量

みで調整してください。オールスパイスとクロー
ブは粉を使用しましたが、スープを濁らせたくな
ければ、ホールがいいと思います。
ポイントは、③で玉ねぎを最後に入れることで
す。透明になるかならないくらいで、くたっと
させずにシャキシャキ感を残してください。ニン
ニクは香りづけなので、食べたくない人は細かく

●レシピ

- 鶏肉に塩、コショウをして鍋に油を引いて焼く
- ①の鍋に水800mlとスパイス、チキンコンソメ、
ニンニクを入れて煮る
- 鶏肉に火が通ったら、8mm 程度に厚めに輪切
りした玉ねぎと酢 100ml、(あればハラペーニョ)
を入れて沸騰させる
- ③を皿に盛る。トルティーヤを四等分くら
いにカットし、別皿に盛る



ベリーズの人たちは外食時にいるいるなスープをよく食
べます。僕が一番好きだったのは、写真の「チモーレ」
という黒いスープです。ベリーズにしかないペースト状
の調味料「ブラックリカード」とさまざまなスパイス、チ
キン、野菜、ゆで卵を煮込んだスープです。味はスープ
カレーに似て少しスパイシーで、いろいろ食材を煮込
んでいるためコクがあります。ご飯やトルティーヤと
共に食べていました。

暮らしている市、町、村



私の住んでいるカシシは、首都ルサカ近郊にある農村です。村には小さなお店や露店があるものの、買えるものが限られているため、2週間に1度くらいルサカ市内に買い出しに行っています。ルサカにはショッピングモールやレストラン、スポーツ施設などがあるので、あまり生活に不自由はしていません。ルサカと比べると不便に思うこともありますが、朗らかな人が多くて静かで、落ち着くことのできるお気に入りの村です。



① 村の中心部にあるパン店
② 買い物できる店はごくわずか

公開！ 私の派遣国生活



[ザンビア]

なかむらこうた
中村光多さん

(野菜栽培 / 2023 年度 1 次隊・北海道出身)

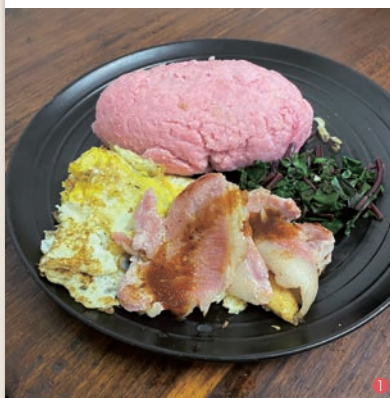
活動の様子



活動で使用している温室。長らく使用されておらず土が乾燥して固まっていたため、水や有機質で土壌改良するところから始めた

配属先のカシシ農業研修センターは、農業関係者に有機農業の技術を指導する施設です。私は温室で種子用に野菜を栽培し、育てた野菜を使って職員や学生に種の取り方を指導しています。任地ではカボチャやオクラなどの野菜も実ではなく葉を食べるので、いい実をつけるために大きく育てる必要がなく、日本と比べて狭い間隔で栽培されていたりするので、最初は驚きました。温室で、実を育てて種を取るために野菜同士の間隔をよく空けて余分な枝も切る栽培法を実践してきたところ、最近では現地の人々も興味を持って見に来てくれています。

食べ物



① 中村さんが自炊で作った食事。ピーツで着色したシマを添えた
② 任地で売られているサモサ(肉や野菜を小麦粉の生地で包んで揚げた食べ物)・揚げパンなどの軽食類

任地には食堂などがなく、もっぱら自炊しています。ザンビアではトウモロコシの粉をお湯と混ぜて作るシマが主食としてよく食べられていて、ルサカのスーパーでは日本米に近い食感のザンビア産の米も買うことができます。中華食材店で日本の食材も買えますが、輸入品は高く、例えば3パック1セットの納豆が1,400円ほどです。任地にある露店ではサモサや揚げパンなどが売られており、1個10円ほどで買うことができます。

住まい



① 昼休みに帰宅した時にくつろいだりする愛用のリクライニングチェア。ベッドに蚊帳は必須
② 室内で種子を乾かしている様子

一戸建ての職員宿舎に一人で住んでいます。間取りは3LDKで、取った種を広げて乾かすための部屋をもうけるなど、日本では考えられないような贅沢なスペースの使い方をしています。南半球のザンビアでは日光が北から差するのですが、建物の北側に窓がなく日差しが室内に入りにくい構造になっているため昼間でも室内は涼しく感じます。家ではお湯と電気が使えますが、不安定なので、停電時に冷蔵庫を冷やすための氷を冷凍庫で作っておくなどの工夫をしています。

写真提供=中村光多さん Text=飯淵一樹(本誌)